

—国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—

# 伊藤田田中遺跡 屋敷田遺跡

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う、伊藤田田中遺跡と屋敷田遺跡の発掘調査報告書です。

調査を行った中津市は、周防灘に面する沖代平野などの平野部と、洪積台地である下毛原台地、そして八面山から伸びる低丘陵が織りなす比較的なだらかな地形を呈する地域で、古来より人々の生活が営まれ、著名な遺跡も数多くあります。今回報告する二遺跡は、洪積台地のいわゆる下毛原台地と犬丸川を隔てた沖積地に位置する古代から中世の遺跡で、中でも古代については官道の一部や製鉄炉が、中世については集落の一面から館跡が見つかるなど、大きな成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、今回の調査に御協力いただいた多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター  
所長 佐藤 英一

## 例 言

- 1 本書は大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受け実施した、伊藤田中遺跡と屋敷田遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は国道212号(中津道路)道路改良工事に伴って、平成17年度に屋敷田遺跡1次(A区・C区)と伊藤田中遺跡1次(A、B区の一部)、同18年度に伊藤田中遺跡2次(A、B区の残り)とC、D、E、G区)、同19年度に屋敷田遺跡2次(B区)と伊藤田中遺跡3次(F区)の調査を実施した。なお、伊藤田中遺跡は、調査時は「野依地区条里跡(田中地区)」と呼称していたが、調査区まで条里が及ばないことが明らかになったので、平成19年度に遺跡範囲の変更と新規遺跡の登録を行い、「伊藤田中遺跡」としたものである。
- 3 伊藤田中遺跡2次と屋敷田遺跡2次・伊藤田中遺跡3次の調査については、一部業務をそれぞれ明大工業株式会社と東海アナース株式会社に委託して実施した。
- 4 製鉄炉関係の遺物の整理については、穴澤義功氏(たたら研究会)に委託して実施した。また、鉄滓等の各種集計については姫野久恵(大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託)の協力を得た。  
また、放射性炭素年代(AMS)測定については(株)加速器分析研究所、製鉄関係遺物の金属学的分析は(株)九州テクノロジーサーチ、自然遺物の分析は(株)古環境研究所にそれぞれ委託して実施した。
- 5 本文中で標記した遺構番号(S-番号)は、遺物注記との整合性を保つため、現場段階のものをそのまま使用している。そのため、後に遺構ではないことが明らかになったものなどにより欠番が生じている。なお、調査段階では遺構の種別にかかわらず通し番号であるため、遺構種別ごとには通し番号とはなっていない。また、伊藤田中遺跡において、本報告書では詳細を記さなかった遺構については、各区の遺構配置図にS番号を記入しているので、附表4)「伊藤田中遺跡遺構一覧表」を参照のこと。
- 6 図中で示した座標は、世界測地系である。方位も座標北を示している。
- 7 出土遺物は、大分県教育庁埋蔵文化財センターですべて保管している。
- 8 本書の執筆は、第1章から第3章(F区関係以外)と第6章を小柳和宏(大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹)、第3章(F区関係)と第4章を江田豊(大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹)が行い、小柳と江田が編集を行った。  
なお、第5章第1節は(株)加速器分析研究所、同第2節は(株)九州テクノロジーサーチ、同第3節は(株)古環境研究所によるものである。

## 目次

序文	
例言	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 伊藤田田中遺跡	8
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	11
1) 各区の概要	11
a A区	11
b B区	11
c C区	11
d D区	15
e E区	15
f F区	16
g G区	16
2) 古代	17
a 道路跡	17
b 製鉄炉跡	18
c 溝跡	36
3) 中世	40
a 館跡	40
b 集落跡	103
c 水路・水田跡	125
4) 近世以降	131
溝跡・水田跡	131
第3節 製鉄関係分析用遺物の考古学的観察	135
第4節 小結	141
第4章 屋敷田遺跡	142
第1節 調査の概要	142
第2節 各調査区における遺構番号の統一	143
第3節 層序	144
第4節 遺構と遺物	145
1) 掘立柱建物	145
2) 溝	146
3) 中世水田及び関連遺構	153
4) 出土遺物	158
5) 近世水田及び関連遺構	159
第5節 小結	163
第5章 自然科学的調査の成果	164
第1節 伊藤田田中遺跡における放射性炭素年代 (AMS)測定(加速器分析研究所)	164
第2節 伊藤田田中遺跡における製鉄関連遺物の分析 (九州テクノリサーチ)	168
第3節 屋敷田遺跡の自然遺物の分析 (古環境研究所)	186
第6章 総括	195
附表	
1) 伊藤田田中遺跡鉄関連主要要素一覧表	202
2) 日本古代の製鉄遺跡の編年と系譜	204
3) 伊藤田田中遺跡遺物観察表	205
4) 伊藤田田中遺跡遺構一覧表	209
写真図版 報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡
第2図	遺跡周辺の地形と調査箇所
第3図	遺跡周辺の小字集成図
第4図	旧宇図による田中集落部分旧宇図
第5図	調査区配置図
第6図	A区～E区遺構配置図
第7図	A区遺構配置図
第8図	B区遺構配置図
第9図	C区遺構配置図
第10図	D区遺構配置図
第11図	E区遺構配置図
第12図	F区遺構配置図
第13図	G区遺構配置図
第14図	A区連続不定形土坑(道路跡)
第15図	A区不定形土坑
第16図	C区製鉄炉跡
第17図	製鉄関連遺物構成図(1)
第18図	製鉄関連遺物構成図(2)
第19図	製鉄関連遺物(1)
第20図	製鉄関連遺物(2)
第21図	製鉄関連遺物(3)
第22図	製鉄関連遺物(4)
第23図	製鉄関連遺物(5)
第24図	製鉄関連遺物(6)
第25図	製鉄関連遺物(7)
第26図	製鉄関連遺物(8)
第27図	製鉄関連遺物(9)
第28図	A～D区第1号溝実測図
第29図	A～D区第1号溝土層断面図
第30図	A～D区第1号溝出土遺物(1)
第31図	A～D区第1号溝出土遺物(2)
第32図	B区第2号溝実測図
第33図	B区第2号溝出土遺物
第34図	A区館部分遺構配置図
第35図	A区第1号堀実測図
第36図	A区第1号堀内土器廃棄土坑
第37図	A区第1号堀廃棄土坑拡大図
第38図	A区第1号堀出土遺物(1)
第39図	A区第1号堀出土遺物(2)
第40図	A区第1号堀出土遺物(3)
第41図	A区第1号堀出土遺物(4)
第42図	A区第1号堀出土遺物(5)
第43図	A区第1号堀出土遺物(6)
第44図	A区第1号堀出土遺物(7)
第45図	A区第1号堀出土遺物(8)
第46図	A区第1号堀出土遺物(9)
第47図	A区第1号堀出土遺物(10)
第48図	A区第1号堀出土遺物(11)
第49図	A区第1号堀出土遺物(12)
第50図	A区第1号堀出土遺物(13)
第51図	A区第1号堀出土遺物(14)
第52図	A区第1号堀出土遺物(15)

第53図	A区第1号堀出土遺物(16)
第54図	A区第1号堀出土遺物(17)
第55図	A区第1号堀出土遺物(18)
第56図	A区第1号堀出土遺物(19)
第57図	A区第1号堀出土遺物(20)
第58図	A区第1号堀出土遺物(21)
第59図	A区第1号堀出土遺物(22)
第60図	A区第1号堀出土遺物(23)
第61図	A区第1号堀出土遺物(24)
第62図	A区第1号堀出土遺物(25)
第63図	A区第1号堀出土遺物(26)
第64図	A区第1号堀出土遺物(27)
第65図	A区第1号堀出土遺物(28)
第66図	A区第1号堀出土遺物(29)
第67図	A区第1号堀出土遺物(30)
第68図	A区第1号堀出土遺物(31)
第69図	A区第1号堀出土遺物(32)
第70図	A区第1号堀出土遺物(33)
第71図	A区第1号堀出土遺物(34)
第72図	A区第1号堀出土遺物(35)
第73図	A区第1号堀出土遺物(36)
第74図	A区第1号堀出土遺物(37)
第75図	A区第1号堀出土遺物(38)
第76図	A区第1号堀出土遺物(39)
第77図	A区第1号堀出土遺物(40)
第78図	A区第2号堀実測図
第79図	A区第2号堀出土遺物(1)
第80図	A区第2号堀出土遺物(2)
第81図	A区第2号堀出土遺物(3)
第82図	A区第1号堀立柱建物実測図
第83図	A区第2号堀立柱建物実測図
第84図	A区第3号堀立柱建物実測図
第85図	A区第4号堀立柱建物実測図
第86図	A区第5号堀立柱建物実測図
第87図	A区第6、7号堀立柱建物実測図
第88図	A区第1号土坑実測図
第89図	A区第1号土坑出土遺物
第90図	A区第2号土坑実測図
第91図	A区第2号土坑出土遺物
第92図	A区第3号土坑実測図
第93図	A区第3号土坑出土遺物
第94図	A区第1号井戸実測図
第95図	A区第3号溝実測図
第96図	A区第4、5号溝実測図
第97図	A区第5号溝出土遺物
第98図	A区第6号溝実測図
第99図	A区第6号溝出土遺物
第100図	A区第7号溝実測図
第101図	A区第7号溝出土遺物
第102図	A区出土の遺物(1)
第103図	A区出土の遺物(2)
第104図	A区出土の遺物(3)
第105図	B区第8号溝実測図

第106図	B区第8号溝出土遺物
第107図	B区第9号溝実測図
第108図	B区第9号溝出土遺物
第109図	B区第10号溝実測図
第110図	B区第11号溝出土遺物
第111図	B区第8号堀立柱建物実測図
第112図	B区第9号堀立柱建物実測図
第113図	B区第3号井戸実測図
第114図	B区第4号土坑実測図
第115図	B区第4号土坑出土遺物(1)
第116図	B区第4号土坑出土遺物(2)
第117図	B区第5号土坑実測図
第118図	B区第5号土坑出土遺物
第119図	B区その他の出土遺物(1)
第120図	B区その他の出土遺物(2)
第121図	C区第12号溝実測図
第122図	C区第12号溝出土遺物(1)
第123図	C区第12号溝出土遺物(2)
第124図	C区第13号溝実測図
第125図	C区第10号堀立柱建物実測図
第126図	C区柱穴等出土遺物
第127図	D区第14号溝実測図
第128図	D区第14号溝出土遺物(1)
第129図	D区第14号溝出土遺物(2)
第130図	D区第15号溝実測図
第131図	D区第16号溝実測図
第132図	D区第15、17号溝出土遺物
第133図	D区第6号土坑実測図
第134図	D区第7号土坑実測図
第135図	D区第7号土坑出土遺物
第136図	D区第4号井戸実測図
第137図	D区第4号井戸出土遺物
第138図	D区出土の遺物
第139図	F区第11号堀立柱建物実測図
第140図	F区第8号土坑実測図
第141図	F区第8号土坑出土遺物
第142図	F区第9号土坑実測図
第143図	F区第10号土坑実測図
第144図	F区第11号土坑実測図
第145図	F区第9号土坑出土遺物
第146図	F区第12号土坑実測図
第147図	F区第12号土坑出土遺物
第148図	A区土層断面図
第149図	E区第17号溝実測図
第150図	E区第17号溝出土遺物実測図
第151図	D-E区横断土層断面図
第152図	D-E区横断土層位置図
第153図	G区第18号溝実測図
第154図	F区第19、20号溝実測図
第155図	G区南壁土層断面図
第156図	G区第21号溝実測図
第157図	G区出土遺物実測図
第158図	近世の遺物(1)
第159図	近世の遺物(2)

第160図	近世の遺物(3)
第161図	調査区及び遺構配置図
第162図	B区北壁土層図
第163図	SD-18実測図
第164図	SD-18出土遺物実測図
第165図	SD-1(A区)実測図
第166図	SD-1(B区)実測図
第167図	SD-1(C区)実測図
第168図	SD-4実測図
第169図	SD-5実測図
第170図	SD-6実測図
第171図	SD-7実測図
第172図	SD-8-9実測図
第173図	SD-11実測図
第174図	SD-4-5出土遺物実測図
第175図	A区、B区中世水田関連遺構分布図
第176図	畦畔20実測図
第177図	畦畔21実測図
第178図	畦畔22実測図
第179図	SD-2(A、B区)実測図
第180図	SD-3実測図
第181図	SK-17実測図
第182図	中世水田面及び関連遺構出土遺物実測図
第183図	A、B区近世水田関連遺構配置図
第184図	畦畔24実測図
第185図	畦畔25実測図
第186図	畦畔26実測図
第187図	SX-19実測図
第188図	近世水田層出土遺物実測図
第189図	屋敷田遺跡周辺半図
第190図	【参考】暦年較正グラフ(1)
第191図	【参考】暦年較正グラフ(2)
第192図	屋敷田遺跡プラント・オパール分析結果
第193図	屋敷田遺跡における花粉ダイアグラム
第194図	伊藤田中・屋敷田遺跡の時期別変遷
第195図	伊藤田地区の歴史的景観(古代～中世)
第196図	官道と宇佐宮の関係

## 表目次

第1表	下毛原台地周辺の遺跡
第2表	製鉄関連遺物遺構別組成表
第3表	製鉄関連遺物集計表(1)
第4表	製鉄関連遺物集計表(2)
第5表	製鉄関連遺物集計表(3)
第6表	製鉄関連遺物集計表(4)
第7表	坏A形式と坏B形式の割合
第8表	製鉄関係分析資料一覧表
第9表	各調査区遺構番号統一表
第10表	B区北壁土層観察表
第11表	SD-1(A区)A-A' 土層観察表
第12表	SD-1(A区)B-B' 土層観察表
第13表	SK-16土層観察表
第14表	年代測定結果一覧表
第15表	暦年較正年代一覧表

第16表	分析資料対比表
第17表	プラント・オパール分析結果表
第18表	屋敷田遺跡における花粉分析結果

## 図版目次

図版1	伊藤田中遺跡2次調査分空中写真1(上が北) 同上2(下が北)
図版2	伊藤田中遺跡2次調査分空中写真3(西から) 同上4(東から)
図版3	伊藤田中遺跡1次調査分空中写真(上が北) 伊藤田中遺跡2次調査北東角から望む
図版4	伊藤田中遺跡A区古代道路跡 伊藤田中遺跡C区古代製鉄炉跡
図版5	A区北半の完掘状況・A区北半の完掘状況(不定形土坑)・A区第3号、4号、5号溝(右から)・A区第1号溝・A区第1号溝土層断面・A区南半の第1号、2号堀(北から)・A区南半の第1号堀完掘状況(南から)・A区第1号堀土層断面
図版6	A区第1号堀土層断面・A区第1号堀内廃棄土坑・A区第1号堀内廃棄土坑・A区第1号堀内廃棄土坑・A区第1号堀内廃棄土坑・A区南半第1号堀完掘状況(南から)・A区第1号堀耕作部分の立ち上り部(右側に杭が2本見える)・A区北半第1号堀完掘状況(北から)
図版7	A区第1号堀(東西方向部分)完掘状況(西から)・A区第2号堀土層断面・A区南西部第1～4号掘立柱建物・A区南半調査状況・A区第1号土坑・A区第1号井戸・B区北半完掘状況
図版8	B区南半完掘状況・B区第1号溝調査状況・B区第1号溝土層断面B・B区第1号溝完掘状況・B区第8号溝(南から)・B区第4号土坑折敷出土状況・B区第3号井戸・B区柱穴遺物出土状態
図版9	C区第12号溝・C区製鉄炉検出状況・C区製鉄炉東排滓坑・C区製鉄炉東排滓坑・C区製鉄炉東排滓坑・C区製鉄炉東排滓坑土層断面・C区製鉄炉西排滓坑・C区製鉄炉東排滓坑
図版10	C区製鉄炉完掘状況・C区製鉄炉炉床部の状況・C区製鉄炉完掘状況(東から)・D区調査区西端土層断面・D区第4号井戸・D区第6号
土坑・D区とE区間の土層状況・D区第17号溝	
図版11	F区全景・F区SB-1完掘状況・F区SD-2完掘状況・F区SK-5・SD-3・SD-4検出状況・F区SK-5完掘状況
図版12	F区SK-5掘出土状況・F区SK-6～8・SD-2検出状況・F区SK-7完掘状況・F区SK-8完掘状況・F区SK-9完掘状況
図版13	G区第22号溝検出状況・G区第22号溝・G区南西壁の状況・G区第21号溝・G区第21号溝
図版14	伊藤田村絵図
図版15	伊藤田中遺跡製鉄関係遺物(1～21)
図版16	伊藤田中遺跡製鉄関係遺物(22～58)
図版17	伊藤田中遺跡製鉄関係遺物(59～79)
図版18	伊藤田中遺跡製鉄関係遺物(80～102)
図版19	伊藤田中遺跡製鉄関係遺物(103～119)・岡出土遺物
図版20	伊藤田中遺跡出土遺物
図版21	伊藤田中遺跡出土遺物
図版22	伊藤田中遺跡出土遺物
図版23	伊藤田中遺跡出土遺物
図版24	伊藤田中遺跡出土遺物
図版25	伊藤田中遺跡出土遺物
図版26	伊藤田中遺跡出土遺物
図版27	伊藤田中遺跡出土遺物
図版28	伊藤田中遺跡出土遺物
図版29	屋敷田遺跡空中写真(2次調査分)
図版30	屋敷田遺跡SB-1・同SD-1
図版31	屋敷田遺跡SD-5～SD-8・同畦畔
図版32	屋敷田遺跡畦畔・同SD-3・同SK-16・同SD-2・同SX-19
図版33	屋敷田遺跡出土遺物

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

中津道路は、中津港から日田市までのいわゆる中津日田道路の一部をなす路線である。路線は国道213号(旧国道10号線)の犬丸地区から、現国道10号線(中津バイパス)の伊藤田地区までの約2km区間の新設道路で、大部分が盛土工法による立体交差となる。

同区間は平成10年12月に整備区間となり、同14年度に分布調査を実施した。その結果、周知遺跡は1ヶ所(野依地区糸里跡：後に調査地点は伊藤田田中遺跡として新たな遺跡で登録)であるものの、その他7ヶ所で遺跡の可能性がある地点が確認された。そして、平成14年度以降買取できた地点から順次試掘調査に入ることになった。

平成15年1月に3ヶ所(内、1ヶ所が後に本調査される上畑成遺跡<sup>※1</sup>)、同8月に3ヶ所、同11月に3ヶ所(内、2ヶ所が後に本調査される馬下遺跡<sup>※2</sup>と野田遺跡<sup>※3</sup>)の試掘調査を行い、同16年3月には1ヶ所で立会調査、同9月に1ヶ所(後に本調査を実施する北小枇杷遺跡<sup>※4</sup>)、同17年1月に1ヶ所、同2月に1ヶ所(後に本調査される屋敷田遺跡)同6月に1ヶ所、同8月に1ヶ所(後に本調査される田代遺跡<sup>※5</sup>)、同9月に1ヶ所、同12月に1ヶ所(後に本調査される伊藤田田中遺跡)、同18年7月に1ヶ所(後に本調査される諸田南遺跡D地区<sup>※6</sup>)で試掘調査を行った(調査箇所は当初の8ヶ所以外に増加)。

その結果、同区間は大部分が平坦地とはいえ過去に圃場整備を実施している田園地帯であり、遺跡がすでに削平されていることが懸念されていたが、合計8ヶ所で遺跡が確認され、順次本調査が実施された。

伊藤田田中遺跡と屋敷田遺跡の2遺跡については、用地買収の関係から複数年度に渡る調査となった。

### 第2節 調査の経過

本書で報告する2遺跡について、調査の経過を述べる。

#### (伊藤田田中遺跡1次調査)

平成17年5月29日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
6月9日	遺構検出作業開始
8月27日	隣接地(東側)試掘調査
9月29日	B区北側半分を重機により表土剥ぎ
10月3日	A区北側半分を重機による表土剥ぎ
10月4日	遺構検出作業
10月11日	遺構掘り下げ開始
11月26日	空中写真撮影
12月1日	調査区埋戻し開始
12月4日	調査終了

<sup>※1</sup> 『諸田南遺跡D地区 田代遺跡 上畑成遺跡 馬下遺跡 ——般国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)——』大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008

<sup>※2</sup> <sup>※3</sup> と同じ

<sup>※3</sup> 『北小枇杷・野田遺跡 ——般国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007

<sup>※4</sup> <sup>※5</sup> と同じ

<sup>※5</sup> <sup>※6</sup> と同じ

<sup>※6</sup> <sup>※1</sup> と同じ

## (伊藤田中遺跡 2次調査)

平成 18 年 6 月 12 日	重機による表土除去開始
6 月 13 日	G 区遺構検出作業
6 月 19 日	B 区遺構検出、掘下げ開始
6 月 13 日	D 区遺構検出、掘下げ開始
6 月 13 日	G 区遺構検出作業
7 月 6 日	B 区にて SD-5(古代の溝)検出、トレンチ掘下げ
8 月 10 日	C 区にて製鉄炉検出
9 月 7 日	A 区遺構検出作業
9 月 28 日	空中写真撮影
10 月 3 日	A 区製鉄炉切り取り作業
10 月 19 日	調査終了

なお、調査中、大澤正己氏(九州テクノロジーサーチ)、藤本啓二氏(国東市教育委員会)には製鉄遺構について現地  
で指導を頂いた。記して感謝申し上げます。

## (伊藤田中遺跡 3次調査)

平成 19 年 6 月 6 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
6 月 7 日	遺構検出、全体写真撮影
7 月 25 日	空中写真撮影
7 月 26 日	調査終了

## (屋敷田遺跡 1次調査)

平成 18 年 1 月 7 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
1 月 9 日	水田関連遺構確認
1 月 27 日	座標測量
3 月 3 日	A 地区全景写真撮影
3 月 12 日	調査区埋戻し開始
3 月 18 日	調査終了

## (屋敷田遺跡 2次調査)

平成 19 年 5 月 22 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
5 月 31 日	近世水田層関係遺構検出、掘下げ
6 月 4 日	孤立柱建物検出
6 月 8 日	重機により、中世水田層まで掘り下げ
6 月 11 日	中世水田層掘下げ開始
7 月 12 日	中世水田下の遺構(SD-01)検出
7 月 25 日	空中写真撮影
7 月 27 日	調査終了



### 第3節 調査組織の構成

本書で報告する2遺跡について、年度ごとの調査体制は下記のとおりである。

#### (平成17年度)

埋蔵文化財センター 所長 渋谷忠章  
 次長兼総務課長 益永孝則  
 調査第一課長 栗田勝弘  
 調査第一課大型事業担当主査 矢部勝徳(伊藤田田中遺跡1次・屋敷田遺跡1次担当)  
 " 囑託 河原英明(伊藤田田中遺跡1次担当)  
 " 囑託 権藤聡子(屋敷田遺跡1次担当)

#### (平成18年度)

埋蔵文化財センター 所長 小玉玉司  
 次長兼総務課長 岡本義博  
 調査第一課長 栗田勝弘  
 調査第一課大型事業担当主幹 小柳和宏(伊藤田田中遺跡2次担当)  
 調査指導 別府大学教授 飯沼賢司

なお、伊藤田田中遺跡2次調査の調査支援委託をおこなった明大工業株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師 牟田健二  
 調査助手 野崎哲司

#### (平成19年度)

埋蔵文化財センター 所長 福田快次  
 次長兼総務課長 岡本義博  
 次長兼調査第一課長 坂本嘉弘  
 調査第一課大型事業担当主幹 江田 豊(屋敷田遺跡2次・伊藤田田中遺跡3次担当)

なお、屋敷田遺跡2次調査と伊藤田田中遺跡3次調査の調査支援委託をおこなった東海アナース株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師 荻 幸二  
 調査助手 角上寿行

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

山国川河口に開ける標高 5m ほどの沖積平野である沖代平野<sup>おきだひら</sup>に対して、その東側に展開する標高 20m 前後の下毛原<sup>しもはら</sup>台地は南北約 4 km 東西約 3 km の平坦面を有しているものの、微視的に見ると南西から北東方向に幾筋もの小谷が伸び、起伏に富んだ地形を呈する。この台地の土地利用状況を見ると、明治 30 年段階では台地奥部(西部)に谷水田が、海岸に近い部分ではやや広い地域に水田が広がっており、台地中央部の平坦面は畑地や山林であった。この土地利用状況は、江戸時代中期初めの元禄 2(1689)年に開削された荒瀬井路によるところが大きく、これ以前はため池灌漑に依存した、小規模な水田経営が主体であり、畑地が大きく卓越した地域であったと考えられる。

集落は、台地中央部にはほとんど無く、北側は海岸平野を望む地域(諸田、定留、是則など)、西側の沖代平野を望む地域(池永、永添など)、南側の犬丸川沖積地に面した地域(福島、伊藤田、犬丸など)に点在している。

今回、国道 212 号(中津道路)が通過するのは、台地の北東端部に近い犬丸から犬丸川の沖積地を望む伊藤田地区である。犬丸地区は、菅原道真が太宰府へ流される時、舟が嵐に遭い漂着した場所と言われており、現在犬丸天満社が鎮座する。現在は海岸線から約 2 km あまり入るが、昔は入り江状に海が入り込んでいたと言われ、現状では幅 50m ほどの谷が残されている。今回調査の対象となった田中地区は、下毛原台地の東を限る犬丸川によって形成された沖積地にあたり、伊藤田田中遺跡は犬丸川の作る自然堤防上の微高地に、屋敷田遺跡は犬丸川の旧河道による低地を中心とした地に立地している。

### 第2節 歴史的環境

下毛原台地周辺の旧石器時代の遺跡を見ると、台地から犬丸川を挟んで南側の丘陵にある伊藤田の才木遺跡でホルンフェルス製の剥片石器が出土していたのみであったが、212 号道路改良に伴う調査で田代遺跡において細石器等が出土しており、下毛原台地上にも旧石器時代遺跡があることが確認された。しかし、詳細については不明である。

縄文時代になると、田代遺跡と上畑成遺跡で早期の無文土器とそれに伴うと考えられる土坑が確認され、その他定留遺跡においても同様の無文土器が出土している。また、台地南端部の黒水遺跡では早期末から前期と想定される陥穴が 23 基発掘されている。陥穴は今回の中津日田道路関係の調査でも、台地上において確認されており、谷部(沖積地)を望む台地斜面部に立地するようである。このように、早期から前期にかけては台地上の平坦面には集落が、そして谷を望む斜面部では陥穴群が設けられていたと想定できる。

縄文時代後・晩期になると、下毛原台地の南側を流れる犬丸川流域において貝塚が出現する。中でも、福島にあるボウガキ貝塚、福島貝塚、植野にある植野貝塚などが、河岸段丘上に立地している。ボウガキ貝塚では、後期中葉の堅穴住居跡 3 基や土坑墓 4 基等が発掘調査されており、県指定史跡になっている。

弥生時代になると、下毛原台地の縁辺部で、上ノ原遺跡、福島遺跡や定留遺跡などが確認されているが、台地の東半を占める犬丸地区は遺跡の空白地帯であった。広い下毛原台地より、山から伸びてきた丘陵先端部などに立地する遺跡が目立つ。確かに、今まで空白であった犬丸地区を横切る今回の中津日田道路の調査でも、弥生時代に属する遺構は、田代遺跡で検出された貯蔵穴 1 基のみである。おそらく、台地の広い平坦面は利用されずに、沖積地を望む河岸段丘や丘陵部に集落が営まれていたものと想定できる。

古墳時代では、下毛原台地が山国川に直接接する相原において、前期から中期の古墳・横穴墓が集中的に築造される。しかし、これらの墳墓を造営した集団は山国川流域の沖積平野に集落を営んでいたと考えられており、実際当該期の大規模集落は下毛原台地西側では確認されていない。しかし、古墳時代後期になると、最近の調査で下毛原台地東側の犬丸から定留地区において集落が発掘調査されており、それらには埴甕が伴うものが多く、

海との関係が想定される集落である。また、下毛原台地から犬丸川を挟んだ南側の伊藤田の丘陵先端部では須志器産地が形成されており、工人居住集落も下毛原台地にあった可能性も考慮する必要がある。しかし、いずれにしても台地の広い平坦面ではなく、谷を望む台地縁辺に集落は築かれ、台地平坦面は畑地あるいは空閑地であったと考えられる。

古代には台地中央部を東西に官道が貫く。そして、その官道と一体的に沖積地には条里水田が開かれることになる。官道添いには相原廃寺、下毛郡衙、瀧社などが配置される一方、台地上ではほとんど集落遺跡は確認されていない。しかし、上畑成遺跡で確認されたように、古代の開削になる水路が台地上に掘られており、ため池灌漑による水田の開発も行われていたのであろう。古代には台地南西部の標高の高い地点にある御澄池が築造されていたとされており、平野の条里に対応するように、台地上でも水田開発が進んでいたのである。

中世になると、台地上では水路が確認され、引き続き水田開発も行われていた。しかし、今見るような台地上の水田景観は、江戸時代に耶馬溪から山国川の水を引いた荒瀬井路の開削を待たねばならず、荒瀬井路以前の状況は、三角池の灌漑がどの程度であるかわからないが、基本的には谷頭に作られた個別小規模なため池灌漑に頼るものであったと思われる。平坦面には畑地が広がっていたのであろう。

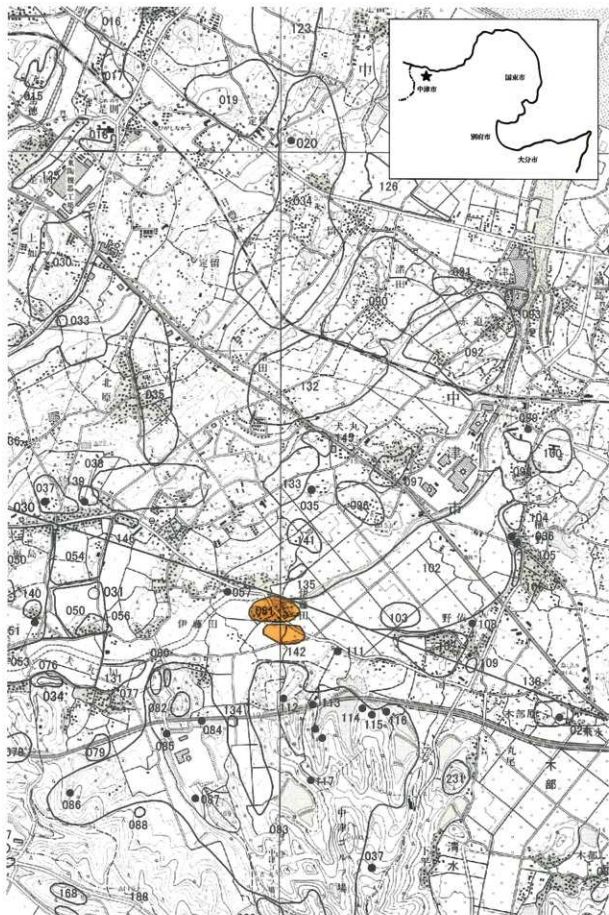
一方、集落は台地の縁辺部に点在する現在のような景観が中世後期には成立していたと想定される。それらの集落には在地領主が在村し、大小の館、あるいは城が集落の中に内包される形で存在した。中でも福島地区は福島城を中核として、周辺には町や館、堀を廻らせる大規模寺院が集中し、宇佐・下毛郡域でも群を抜く存在となる。その他、館が確認される集落は犬丸、諸田、定留などがあげられる。中津に隣接する宇佐郡では「宇佐郡三十六人衆」と呼ばれる在地領主がいるが、下毛郡域も同様な在地領主が点在したのであろう。

近世には下毛原台地は「中津藩」になり、前記した「荒瀬井路」の開削による水田化が推し進められることになる。

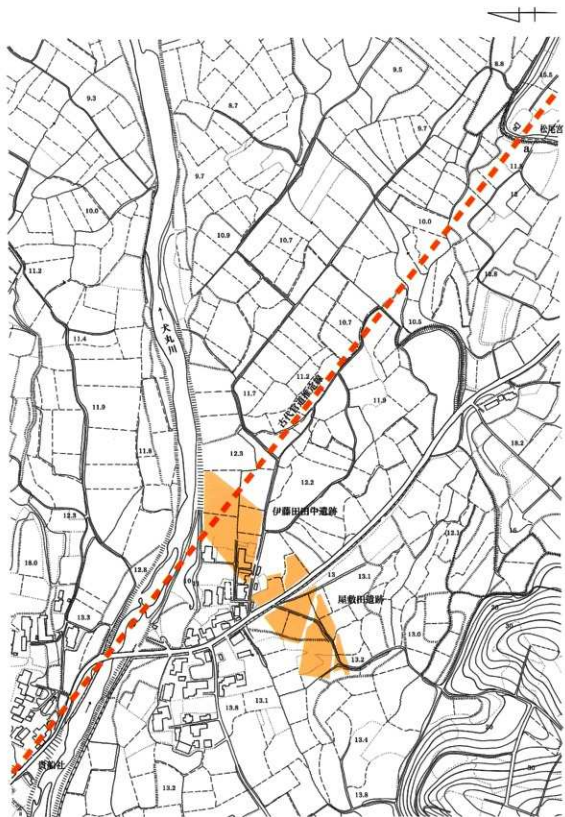
第1表 下毛原台地周辺の遺跡

※番号は第1図中の番号と同じ

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
015	全徳遺跡	弥生・古墳	085	城山窯跡	古墳	116	瓦ヶ池窯跡	古墳
016	舞手橋東段上遺跡	弥生	086	酒ノ上窯跡	古墳	117	ホヤ池窯跡	古墳
017	長別遺跡	弥生・古墳	087	大谷窯跡	奈良	123	田尻大迫遺跡	古墳
018	安松遺跡	古墳・中世	088	才木遺跡	古代	125	舞手川流域城遺跡	古墳・中世
019	是能遺跡	古墳	090	諸田遺跡	弥生・古墳・中世	126	大貝遺跡	縄文・古墳
020	和間貝塚	縄文	091	岩丸城跡	中世	132	諸田南遺跡	古墳・中世
024	六十塚遺跡	古墳	092	十前垣遺跡	古墳・中世	133	上畑成遺跡	縄文・中世
030	上如水遺跡	弥生・古墳	093	末広城跡	中世	134	伊藤田穂屋遺跡	古墳
031	中原遺跡	近世	096	中尾城跡	中世	135	馬下遺跡	古代・中世
033	原遺跡	古墳	097	犬丸城跡	中世	138	古代豊前遺跡	古代
034	定留遺跡	弥生・古墳・中世	098	若旗遺跡	弥生・古墳	139	町居塚敷遺跡	中世
035	北原遺跡	弥生・古墳	099	若旗古墳	古墳	140	飯屋敷遺跡	中世
036	土木貝塚	縄文	100	中須遺跡	古代	141	北小批把遺跡	古墳
037	田丸城跡	中世	103	野依遺跡	弥生・古代	142	屋敷田遺跡	古代・中世
038	長久寺貝塚	縄文・中世	104	植野御藍遺跡	弥生・古墳	145	田代遺跡	弥生・古墳・中世
050	福島遺跡	縄文・弥生・中世	105	植野貝塚	縄文	146	畑中遺跡	奈良・中世
054	三保遺跡	弥生・古墳	106	植野古城遺跡	弥生・古墳	168	三ツ塚古墳群	古墳
056	下伊藤田城跡	中世	107	松尾遺跡	弥生・古墳	188	大源寺横穴墓群	古墳
057	黒川古墳	古墳	108	野依古墳	古墳	231	清水城跡	中世
078	寺道遺跡	古墳・古代	109	野依城跡	中世			
079	安平遺跡	中世	111	是則塚	中世			
080	城山横穴群	古墳	112	夜鳴池窯跡	古墳			
081	伊藤田田中遺跡	古代・中世	113	跡ヶ池窯跡	古墳			
083	野依・伊藤田窯跡群	古墳・古代	114	山田池窯跡	古墳			
084	草場窯跡	古墳	115	大池窯跡	古墳			



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形と調査箇所（昭和51年團場整備前の状況）（1/5,000）

a地点には台地から下る傾り  
跡の道が残る。

### 第3章 伊藤田田中遺跡

#### 第1節 調査の概要

調査は、現在の「田中集落」の東の端を斜めに横切るように伸びる工事範囲で行われた。そのため、遺跡範囲のすべてが明らかになった訳ではない。しかしながら、後述のように現在の集落の地割りとある程度重なる形で遺構の展開が見られたので、遺跡そのものは現在の「田中集落」にほぼ重なる範囲に展開していたことが想定できる。そう考えられるとすると、調査対象となった範囲は、遺跡全体の1割程度ということになる。

調査では、大まかには古代と中世の2時期の遺構が確認された。古代については、道路跡(連続土坑)と溝跡(水路)、さらには製鉄炉跡が確認された。これらは時期を示す遺物が少なく時期比定が難しいが、三者は有機的な関連のもとで展開された遺構群であると想定される。それは、遺跡の北東部に展開する「野依条里」の南限が「宇佐大路」に比定され、この道に沿って水路が想定できることから、遺跡で確認された道路跡と水路がそれぞれ「宇佐大路」と条里に掛かる水路と考えられ、さらに「宇佐大路」の犬丸川渡河点という要地で製鉄が行われたと考えられるからである。古代の製鉄炉は大分県内では初の検出で、送風管を持つ横置きの方形状箱形炉である。

中世は、小字で「城ヶ内\*」と呼ばれる中に収まる形で館が、そしてその西側に展開する形で屋敷区画が検出された。これらの遺構群は現在の集落とほぼ重なっている。つまり、現在の集落につながる、その萌芽が見られたのが中世ということになる。館は、幅約5mの堀が巡る。堀は約50m直線で略南北方向に伸びた後、東に直角に曲がり調査区外に伸びるが、全体の形状・大きさは圃場整備前の地割りから二通りの復元案が考えられる。一つは50m四方で方形に収まるもの(第4図の赤細点線)、もう一つは折れを有しながら東方に約130m伸びるというもの(第4図の赤太点線)。後者の方が四倍弱面積が広くなることになる。館内部では建物が2カ所で見られ、それぞれ1度の建て替えが認められた。さらに、堀には土器が幾度も大量廃棄されており、その数は完形近くは復元できたものだけで1,000点を優に超える。しかしながらほとんど型式差は無く、1度の建て替えと合わせ考えると、13世紀後半から14世紀初頭の中で収まる存続期間が想定できる。

一方、館の西側に展開する集落は、その初現が不明瞭ではあるものの、確実に15世紀から16世紀代には存在している。調査ではB区からE区の4区画が確認され、その内E区が水田で、中世段階では一度も屋敷になっていなかった。残りの3区画は、D区の大部分が調査区外で不明ではあるが、中世段階ではいずれも屋敷区画と考えられる。特にB区は柱穴が密集しており、複数回の建て替えが想定できる。



第3図 遺跡周辺の小字集成分 (明治23年調査)  
(1/1,000)

\* 地元では「ジョウガウチ」あるいは「ジョウガブチ」と呼んでいる。



第4図 旧字図による田中集落部分の地割りと遺構



第5図 調査区配置図

※明治23年に調製された旧字図(第3図)を見ると、小字田中の南側にある小字横打の中を通る果道は、筆を分筆しており、道そのものの新しさを感じる。建設年代は明らかでないが、小字田中における道路の自然さとは対照的であり、本来道は小字田中の南側、即ち横打との境を通り東進し、小字横打と白蔵との境、あるいは白蔵と立花との境を通って南東に進んでいた可能性がある。そして少なくとも図版14にみる絵図の段階(慶応3年)では、既に現果道のラインになっていたようである。

また、これらの館や屋敷以外の地では水田跡が確認されている。第4章で触れる屋敷田遺跡から続く浅い谷水田がG区で確認されている。この水田は館存続期間とほぼ等しいと考えられ、さらにその水田の下から10世紀前後の水路が検出されている。先に述べた古代の水路が廃絶した後、条里に給水する水路として新たに掘削されたものであろう。



第6図 A区～E区遺構配置図



## 第2節 遺構と遺物

### 1) 各区の概要

まず、AからG区に分けて調査を行った関係上、便宜的なものではあるが、各区ごとに概要を記した後に、時期別にまとめて報告を行う。

#### a A区(第7図)

A区は調査区の最も東側に位置し、小字「城ヶ内」の西端にあたる。B区との境は小字「田中」との小字境で設定したが、丁度境から溝(第2号堀)が検出された。そこで、それも含めてA区を概観すると、A区は堀で囲まれた「館」と考えられる遺構にほぼ重なる。この館が、小字「城ヶ内」の「城」にあたる可能性は高い。「館」の西側を画する溝は二重となっているが、外側の堀(第2号堀)は内側の堀(第1号堀)が折れる部分で終わっている。堀で囲まれた内部からは、切り合いがあるものの、掘立柱建物7棟(内1棟は礎板あり)、井戸1基、廃棄土坑1基が検出された。これらは、いずれも13世紀後半～14世紀初頭のものである。さらに、第2号堀の南北方向の1辺は、一度埋められた後、北よりの部分は耕作地(畑地か?)になり、南よりの部分は土器・瓦器の廃棄土坑が複数掘られており、大量の遺物が出土した。

また、これらの「館」遺構に重なって、北西から南東に向けて長楕円形の土坑が、長軸方向を平行にして連続して複数掘られているのが確認された。これらは、「道」の痕跡であると考えられるが、「館」とは軸を異にしており、「館」以前か以後なのか問題となったが、他の遺構から考えて、古代のものであると想定された。また、南端に近い部分では、東西方向に古代の溝(第1号溝・SD-5)が検出された。この溝はB区やD区を貫いてほぼ直線的に伸びるが、このA区ではやや南側に湾曲するようになる。

以上、A区では性格、時期を異にする2面の遺構が展開していた。

#### b B区(第8図)

A区の西側に接する部分で、小字「田中」の東端部に位置する。A区との境は、A区の館遺構の外堀(第2号堀)の西側に平行するように溝(第8号溝・SD-3、6)がある。この溝は、調査区南東部で溜井状になり、そこから西側に折れているのが確認されたが、上部の削平により、それ以上は追えなかった。逆にD区との境は、浅い溝(第9号溝・SD-010)があり、この溝も南西部で東側に折れると考えられるが、上部の削平によりそれ以上は追えなかった。しかし、第8号溝と第9号溝が同一のものであるとすると、B区は浅い溝で囲まれた区画(北側は不明)であるということが出来る。その溝で囲まれた内部からは多数の柱穴が検出されている。これらから4棟の掘立柱建物が復元できたが、実際はさらに多くの切り合う建物跡がある可能性が高い。これらの多くは中世後半期のものであると考えられる。

また、これらの区画とは方位を異にする溝が四条検出された。一つはA区に繋がる第1号溝(SD-5)で、あとは第2号溝(SD-2)、第10号溝(SD-1)、第11号溝(SD-4)である。このうち、第1号溝と第2号溝は古代、第10号溝と第11号溝は中世と考えられる。

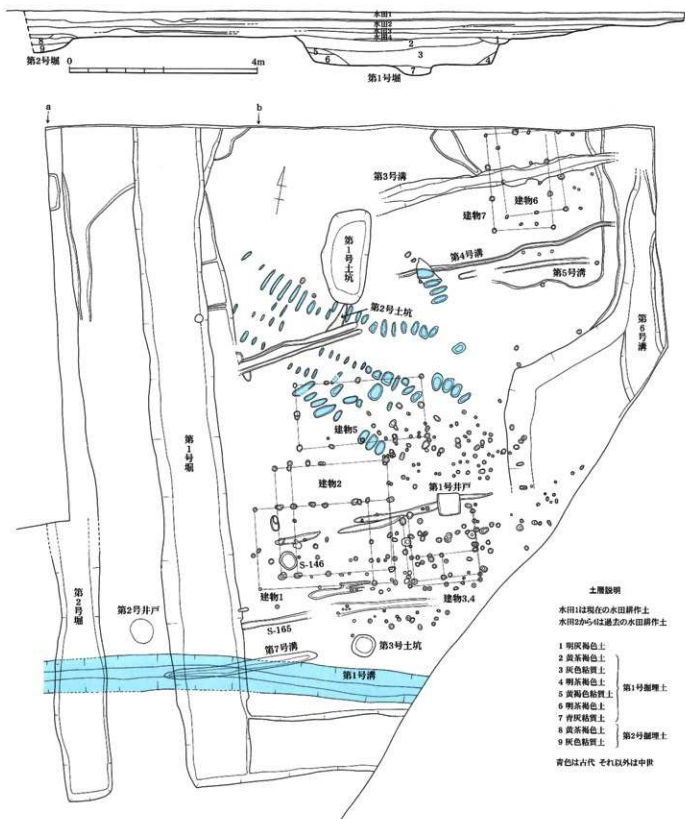
#### c C区(第9図)

C区は、B区の南に接する区画で、調査前までは家屋があった。そのため、明治以降の廃棄土坑(擾乱として処理)が多く、遺構の把握は完全にはできなかった。B区との境は、調査前は溝(SD-1001)や道であったが、調査によって浅い溝(第13号溝・S-105)が確認された。この溝は、東側で一度陸橋部を作り、南北方向の溝に繋がるが、調査区南東部で不明瞭となる。これは、C区の南東部の地山が、後の水田化によってグライ化していることが影響している。南側は溝(第12号溝・S-111)が、西側にも溝(第12号溝・S-109)があり、これらの溝は一体としてこのC区を囲っていたと思われる。内部からは1棟の掘立柱建物を復元できた。これらは中世後半期のものである。

また、このC区からは鉄アレイ形を呈する製鉄炉が検出された。時期を示す遺物はなかったが、形状から古代のものであり、溝で囲まれた区画とは時期が異なる。

-13.000m a A区北壁

b



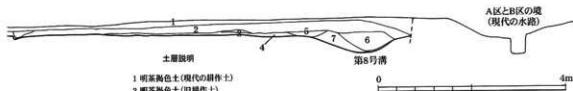
第7図 A区遺構配置図 (1/250)

0 5 10m

13,000m c

B区北壁

d



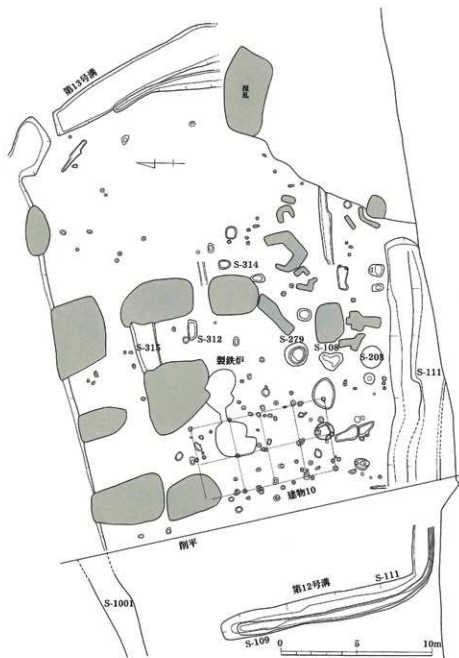
土層説明

- 1 明茶褐色土 (現代の耕作土)
- 2 明茶褐色土 (旧耕作土)
- 3 明黄茶褐色土
- 4 茶褐色土 (耕作土か)
- 5 灰茶褐色土
- 6 暗灰茶褐色土
- 7 灰茶褐色土

第8号溝埋土



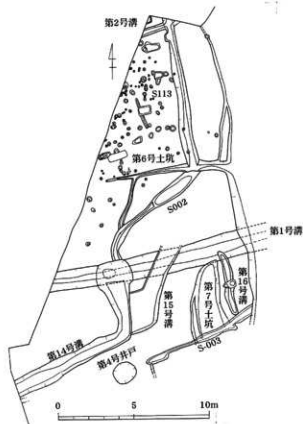
第8図 B区遺構配置図 (1/250)



第9図 C区遺構配置図 (1/250)

## d D区(第10図)

D区はB区の西側にあたるが、B区との境は約10cmの段差が付き(D区の方が高い)、E区との間には調査前は道があった。D区はB区やC区と同様、何らかの区画があり、その南東角部を一部調査したことになる。溝や柱穴も確認されたが、調査が一部分であったことから、全体の状況は不明である。しかし、この区画の南東部分には溝が集中するが、区画の内部よりの部分には柱穴や土坑があるのみであり、この部分から調査区外にかけて、建物が広がっていたことが推測される。これらは中世後半期と考えられる。

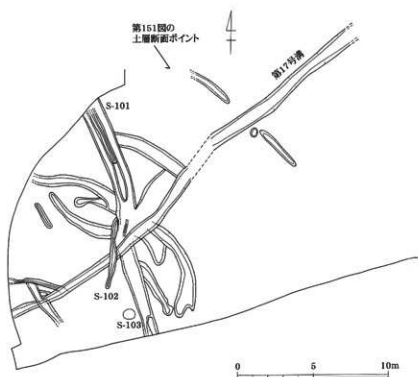


第10図 D区遺構配置図(1/250)

## e E区(第11図)

E区は、AからD区と様相が全く異なり、建物跡は検出されていない。回りを囲むような溝はなく、水田に伴うと考えられる縦横に伸びる溝が検出された。この内に中世に遡るものは第17号溝(S-001)で、この溝を境にして南側には水田が広がっていたと考えられる。

この第17号溝と方位の異なる他の溝は、いずれも近世以降のものと考えられる。



第11図 E区遺構配置図(1/250)



第12図 F区遺構配置図 (1/250)

## f F区(第12図)

前年度に西側に接するG区の本調査を行い、掘立柱建物の一部と思われる柱穴群が検出されていたため、この建物に関連する遺構が検出することが見込まれていた。

表土剥ぎの結果、南東方向に走る3条の溝と2×3間の掘立柱建物1棟、焼土や礫とともに輸入中国銭を供伴する土坑、その他遺物を伴う小土坑が4基検出された。G区において確認された柱穴群に関連する遺構は今回の調査では検出されなかった。(江田)

## g G区(第13図)

G区は、現県道に面した水田であった場所である。調査の結果、調査区西側で、南西から北東に向けて延びる溝(第21号溝…S-003)が検出された。この溝は県道を挟んで調査を行った屋敷田遺跡(第4章)の溝(SD-1)と同様の形状を呈し、位置関係からも同一の溝と判断できる。この溝の上部には水田層が広がり、その広がり調査区中程までであった。すなわち調査区東半分は礫を含む土山が露出し、F区に見るように建物も建つ「場」であった。



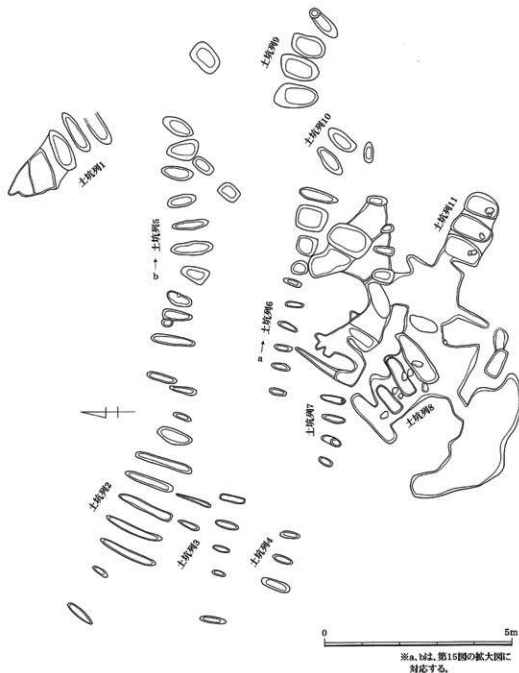
第13図 G区遺構配置図 (1/250)

## 2) 古代

古代に属する遺構はAからD区を東西に貫く溝(水路)、A区中央で確認された道路跡を示す連続不定形土坑、そして、C区で確認された製鉄炉 1 基である。いずれからも時期を明確に特定出来る遺物が出土しなかったが、製鉄炉の形状や僅かに出土した溝(水路)内遺物などから、時期を古代に比定した。なお、A～C区では多数の柱穴が検出されたが、確実に古代に属する建物は確認できなかった。

## a 道路跡(第14, 15図)

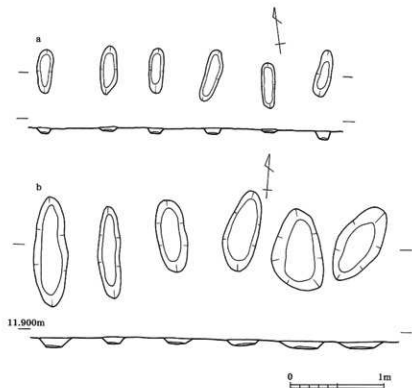
連続する不定形土坑がA区で確認された。波板状の連続土坑はほぼ同じ地点で11条以上ある。第14図からわかるように、土坑相互の切り合いはほとんど無く、方向はほぼ $N-70^{\circ} \sim 75^{\circ}-W$ である。しかし、土坑列1だけは $N-33^{\circ}-W$ と角度が振れている。いずれの土坑の中からも木痕跡や砂利、遺物の出土はない。埋土はやや粘質のある灰褐色土で、上面では土坑を覆い隠すように広がりを見せていた。その範囲はほぼ土坑の分布する部分の東側



第14図 A区連続不定形土坑(道路跡) (1/100)

半分に重なっており、その部分が道路敷であるとする、幅は約10mとなる。側溝が確認されなかったため、同一時期に利用されていた道幅は不明であるが、この地点が犬丸川の渡河点にあたることを考えれば、渡河する地点の変動に伴って、最終的な接続部分の道路方向も定まった可能性が高い。それを示すものが、やや方向を異にする土坑列1であろう。土坑列1はほぼ犬丸川に直交する方向となるので、ある段階で遺跡のすぐ北側が渡河点であったことを示すものであろう。

大部分の土坑列が示すN-70°-W前後という方向は、古代官道である豊前道(いわゆる「勅使街道」あるいは「宇佐大路」とほぼ一致する。そして、検出された遺構は、「宇佐大路」の復元的調査の報告書<sup>\*1</sup>で示された想定ラインに重なるのである。さらに周辺を細かく見ると、遺跡の東約600mには丘陵から平野に下る堀割が残り、そこから圃場整備前の農道(やや南北に揺らぎがあるが)を結んだ延長線上に、伊藤田中遺跡の道路遺構があるのであるのがわかる(第2図参照)。そして、この直線は犬丸川対岸の橋のたもとを通過して、福島地区に現在も残る直線的な地割りに重なるのである<sup>\*2</sup>。よって、伊藤田中遺跡で確認された道路跡は、豊前道であることができるのである。



第15図 A区連続不定形土坑(1/40)

## b 製鉄炉跡

### 遺構(第16図)

道路遺構から約100m南西に離れた地点で見つかった長方形箱形炉である。排滓場(排滓坑)を含めた全長は2.35m(復元)で、平面形は鉄アレイ形をなす。製鉄炉下部の被熱を受けた部分は長方形で、長さ0.62m、幅0.2m、深さは5~6cmである。被熱部はその両側に掘られた排滓坑の炉寄りの壁にも及ぶ(図の朱色部分)。排滓坑は東側のもの(以下、東排滓坑)が1.0×0.9mのややいびつな楕円形を呈し、床面は2段掘りになって、一番深いところで15cmである。内側の掘り込み(2段目)の炉本体のみ火熱を受け赤変していることを勘案すると、炉構築時の掘り込みが内側のもので、外側のもの(1段目)は後ほど掘り直されたものと考えられる。北側は一部後世の攪乱により破壊されている。床面には炉本体側が赤変した川原石が据えられており<sup>\*3</sup>、排滓坑内で鉄塊の取り出し作業を行ったことが推測される。西側のもの(以下、西排滓坑)は1.0×0.6mで、深さは15cmである。西排滓坑は新しい土坑(S-126)に一部切られている。

土層断面図に見るように、東排滓坑では、中央部に炉を壊した際の堆積物と思われる滑混じりのオレンジ色のブロックを含む茶褐色土が堆積し、その上部には、炉下部の掘り込みから続く、焼土ブロックを含む炭混じりの黒色土が広がり、さらにその上に炉壁や滓が堆積している状況が観察された。

<sup>\*1</sup> 『宇佐大路-宇佐への道調査-』大分県文化財調査報告 第97輯 大分県教育委員会 1991

<sup>\*2</sup> この直線道の一部については、県道の改築工事に伴い平成21年度に調査(丁ノ坪遺跡)が行われる。

<sup>\*3</sup> 不注意にも取り上げた石の所在が不明で、正確な大きさ、重さ等がわからない。



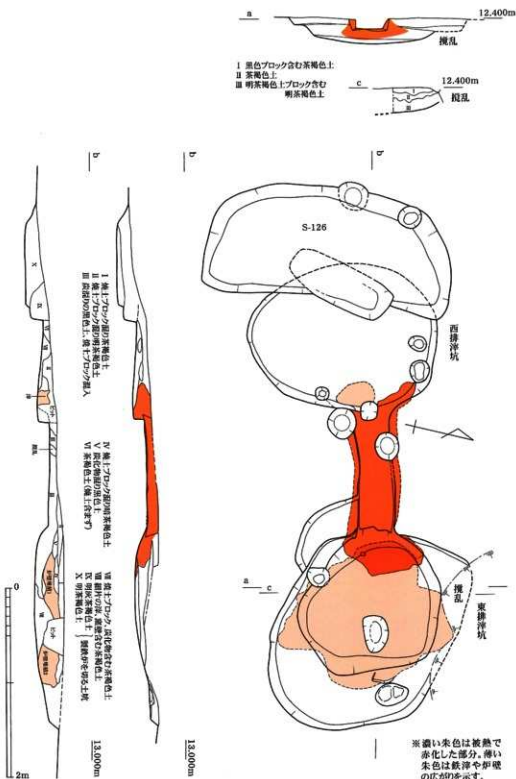
なお、「ふいご」の設置された痕跡などは検出されなかった。炉の形状や土製の送風管の存在から、8世紀代前後に位置づけられるものであろう。

また、後述(第5章第1節)のように、炉跡出土の木炭の放射性炭素年代測定(AMS法)によると、2点とも7世紀第3四半期を中心とする時期に位置づけられる。このことは、福岡県域ではあるが最も近い松丸F遺跡の箱形炉が放射性年代測定や熱残留磁気による地磁気年代、出土遺物などにより7世紀代と考えられていることと矛盾はなく、製鉄炉に係わると考えられる国東で発見されている横口式木炭窯も7世紀後半に位置づけられていることからすれば、今のところ木炭の年代(AMS)である7世紀第3四半期前後に位置づけておきたい。また、今回の遺跡内では7世紀代の須置器(高坏脚部のみで、年代の絞り込みが不可能)が確認されていることも、傍証の一つにはなる。

#### 遺物(第17～25図)

遺物は、西排滓坑、東排滓坑、炉本体から、炉壁や鉄滓、炉底塊など重量にして合計135.5kg出土している。内訳は、粉状の炉壁や鉄滓が50.6kg(37.3%)、炉内滓が23.0kg(17.0%)、炉壁が14.7kg(10.8%)、炉内流動滓が11.3kg(8.3%)、炉底塊が10.5kg(7.7%)、流出溝滓が6.7kg(5.0%)、マグネタイト系遺物が5.9kg(4.3%)、流動滓が5.3kg(3.9%)、流出孔滓が4.5kg(3.3%)、砂鉄焼結塊が1.9kg(1.4%)、送風管破片(重量にして56g)、たたき石1個、工具付着滓2.9g、木炭7.2g、原料砂鉄が出土している。なお、調査現場において、木炭片や砂鉄について全量採取出来てはいない。

総量135.5kgの遺物の内、報告書に掲載した資料は粉状の資料を除く1,391点の中の8.6%にあたる119点(重量にして18.1kg、13.4%)である。出土した遺物の種類はすべて網羅しており、全体の傾向はわかる資料となっている。



第16図 C区製鉄炉跡実測図

第2表からわかるように、全遺物 135.5kg の内、約 70% が東排滓坑から出土している。内訳を見ると、半数を占める鉄滓・炉壁粉混在を除くと、炉内滓、炉壁、炉内流動滓の順に多く、これらが 7 割近くを占める。一方、西排滓坑の遺物量は全体の 25% である。この内、炉内滓、炉壁、炉内流動滓が多いのは東排滓坑と同様であるが、西排滓坑では炉底塊が多いことが注意される。これは、炉底塊取り出し後の、作業状況を示すものであろう。

なお、製鉄関係遺物の理化学的分析の結果については、第 5 章第 2 節を参照のこと。

次に、遺物について説明する。第 17 図 1 から 24 は炉壁である。この内 1 から 18 が長軸側で、19 から 24 が短軸側である。長軸側の内、10 から 18 が通風孔周辺のものであるが、通風孔そのものが残存した破片は確認できなかった。短軸側コーナー付近の 22 から 24 も通風孔周辺、または通風孔下の炉壁である。25 から 27 は送風管の破片である。数は少ないが、この製鉄炉の送風には、土製の送風管が使われたことがわかる資料である。38 から 47 は砂鉄焼結塊で、その内 41 から 47 にはマグネタイト系滓が付着する。48 から 50 はマグネタイト系滓、51 から 53 は炉内流動滓である。54 から 57 は工具付着滓で、その断面形から工具は断面方形または隅丸方形のものが想定される。57 から 67 は流出孔滓で、63 から 67 には工具痕が認められる。68 から 73 は流出溝滓で、74 から 78 は流動滓。79 から 97 は炉底塊で、86 から 88 は工具痕付き、94 から 97 には流出孔滓が付着する。88 と 92、93 は含鉄。98 から 113 は炉内滓で、107 から 113 は含鉄である。114 から 118 は木炭、119 はたたき石である。なお、これらの遺物の詳細は、32 頁の第 3 表（六澤義功氏作成）以降を参照願いたい。

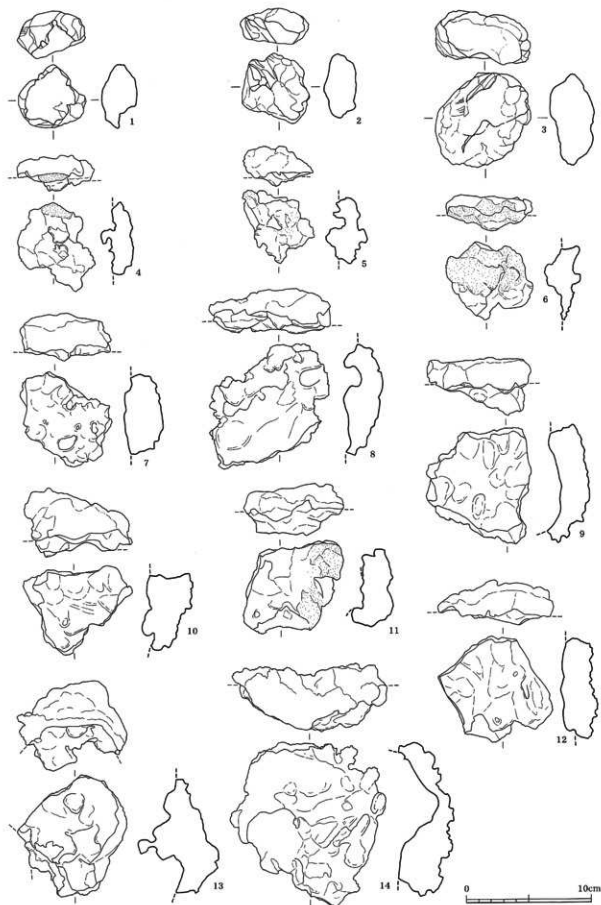
第2表 製鉄関連遺物遺構別集計表

遺物名	遺物名	遺物名													合計(g)	
		1 炉壁	2 砂鉄焼結塊	3 マグネタイト系遺物	4 炉内流動滓	5 工具付着滓	6 流出孔滓	7 流出溝滓	8 流動滓	9 炉底塊	10 炉内滓	11 木炭	12 送風管	13 たたき石		鉄滓・炉壁粉混在
東土坑	重量(g)	12,572.2	1,142.5	3,735.6	7,051.5	0.5	3,135.3	6,049.5	3,334.9	2,285.2	12,441.2	0.3	501.0	0.0	38,756.0	91,005.7
	遺構中比率(%)	13.81%	1.26%	4.10%	7.75%	0.001%	3.45%	6.65%	3.66%	2.49%	13.67%	0.00%	0.55%	0.00%	42.59%	100.00%
	全遺物中比率(%)	9.28%	0.86%	2.76%	5.20%	0.000%	2.31%	4.46%	2.46%	1.67%	8.10%	0.00%	0.37%	0.00%	28.59%	67.14%
西土坑	重量(g)	1,742.8	724.9	1,686.4	3,808.0	2.4	1,397.7	650.8	1,672.1	7,891.0	9,129.7	5.8	50.9	588.3	9,254.7	38,405.5
	遺構中比率(%)	4.54%	1.89%	4.39%	9.39%	0.01%	3.64%	1.69%	4.35%	20.55%	23.77%	0.02%	0.13%	1.53%	24.10%	100.00%
	全遺物中比率(%)	1.29%	0.53%	1.24%	2.66%	0.002%	1.03%	0.48%	1.23%	5.82%	6.74%	0.00%	0.04%	0.43%	6.53%	28.33%
炉本体	重量(g)	318.2	49.7	430.0	549.6	0.0	0.0	48.8	289.5	315.4	1,262.0	1.1	0.0	0.0	2,560.0	5,794.3
	遺構中比率(%)	5.49%	0.86%	7.42%	9.49%	0.00%	0.00%	0.84%	4.65%	5.44%	21.78%	0.02%	0.00%	0.00%	44.01%	100.00%
	全遺物中比率(%)	0.23%	0.04%	0.32%	0.41%	0.00%	0.00%	0.04%	0.20%	0.23%	0.93%	0.00%	0.00%	0.00%	1.88%	4.27%
その他	重量(g)	55.6	0.0	11.7	81.3	0.0	0.0	0.0	0.0	188.3	0.0	0.0	0.0	0.0	336.9	—
	遺構中比率(%)	16.50%	0.00%	3.47%	24.13%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	55.89%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%	—
	全遺物中比率(%)	0.04%	0.00%	0.01%	0.06%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.14%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.25%	—
合計(g)	14,688.8	1,837.1	5,863.7	11,290.4	2.9	4,533.0	6,748.1	5,276.5	10,471.6	23,021.2	7.2	551.9	588.3	50,560.7	135,542.4	
全遺物中比率(%)	10.8%	1.4%	4.3%	8.3%	0.0%	3.3%	5.0%	3.9%	7.7%	17.0%	0.0%	0.4%	0.4%	37.3%	100.0%	

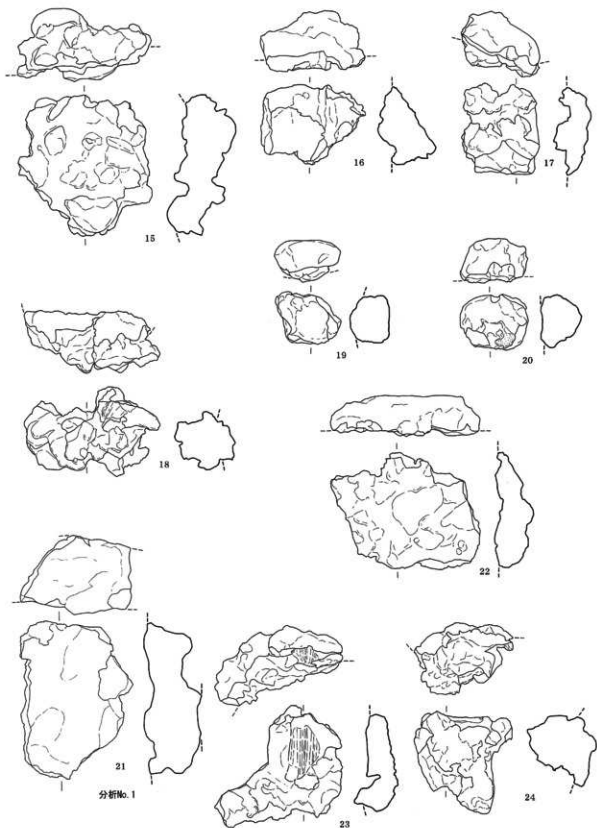
部位	和型(技術部)			和型 (原圖縮二分之一)	透風管	砂鉄 (0.500g以下)	砂鉄結塊 (0.500g以下)	砂鉄結塊 (含鉄)	砂鉄結塊 (含炭)	砂鉄結塊 (含炭)	砂鉄結塊 (含炭)	和型 (工具部付者)
	1	2	3									
上段 上半 燻熱 燻化	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	4	5	6	2	2	2	2	2	2	2	2	2
上段 下半 架設 砂鉄 燻化	7	8	9	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	10	11	12	4	4	4	4	4	4	4	4	4
中段 上半 淨化燻	13	14	15	5	5	5	5	5	5	5	5	5
	16	17	18	6	6	6	6	6	6	6	6	6
下段 上半 燻熱 孔上 淨化燻	19	20	21	7	7	7	7	7	7	7	7	7
	22	23	24	8	8	8	8	8	8	8	8	8
下段 上半 燻熱 孔周 淨化燻	25	26	27	9	9	9	9	9	9	9	9	9
	28	29	30	10	10	10	10	10	10	10	10	10
下段 下半 燻熱 孔上 淨化燻	31	32	33	11	11	11	11	11	11	11	11	11
	34	35	36	12	12	12	12	12	12	12	12	12
分析	37	38	39	13	13	13	13	13	13	13	13	13
	40	41	42	14	14	14	14	14	14	14	14	14

第17図 製鉄関連遺物構成図(1)



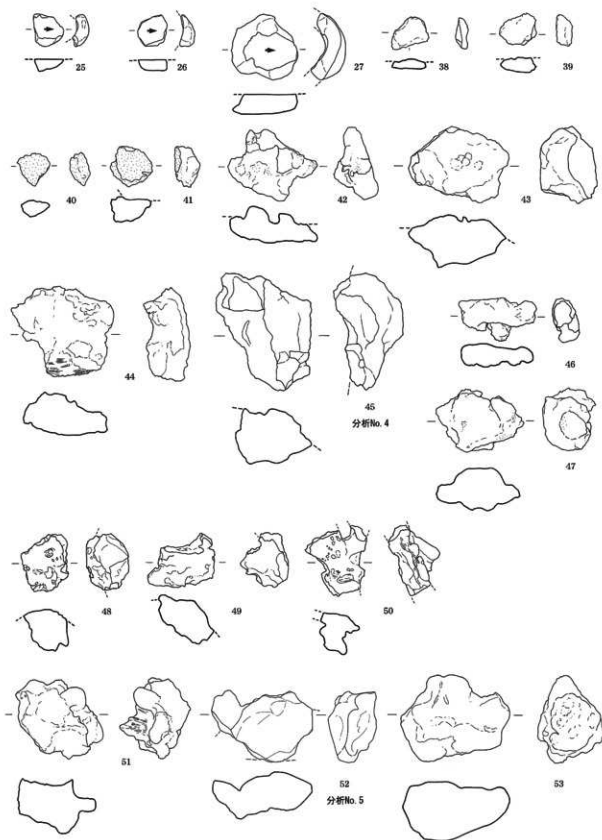


第19圖 製鉄関連遺物 (1) (1/3)

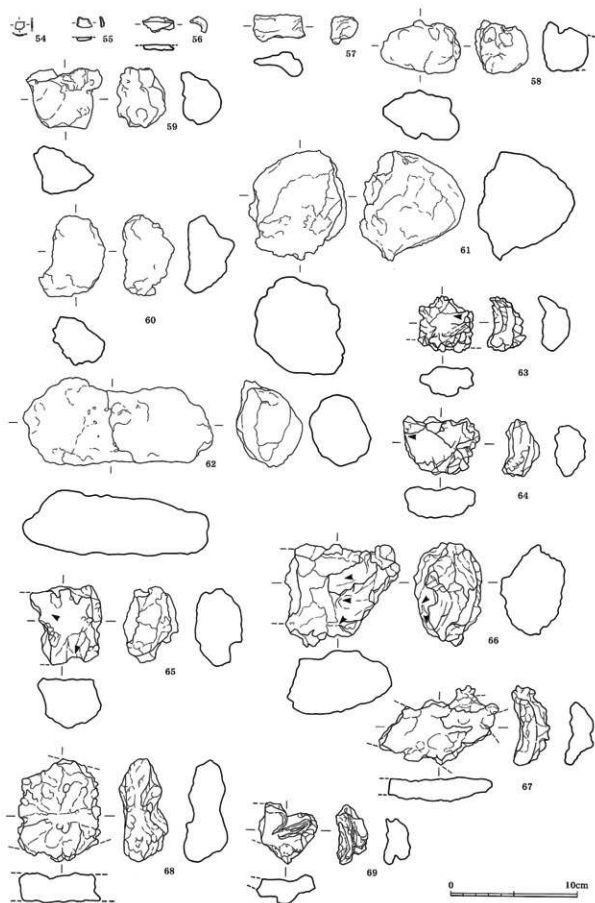


※分析No.は第5章第2節で報告する  
金属学的分析の番号を示す。(以下同じ)

第20図 製鉄関連遺物 (2) (1/3)

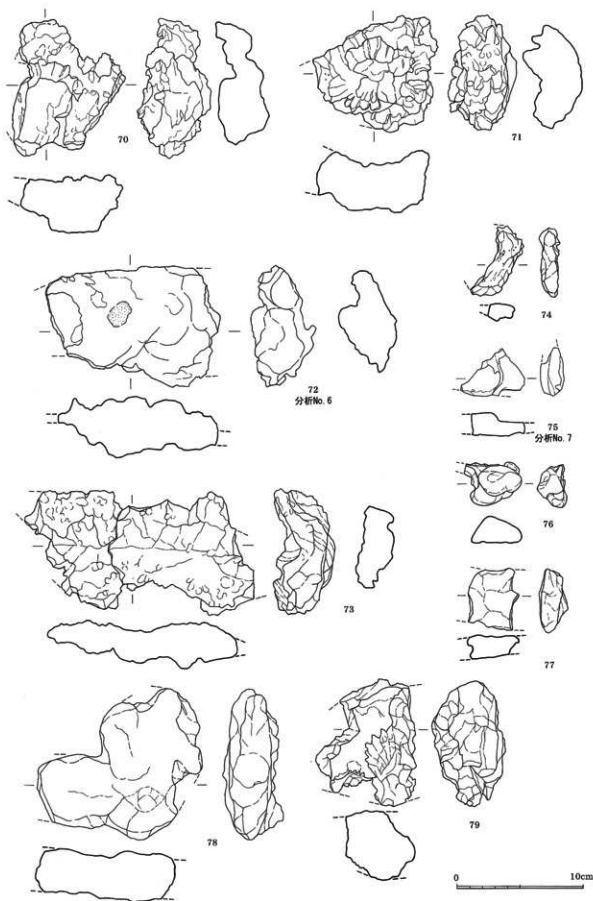


第21圖 製鉄関連遺物 (3) (1/3)

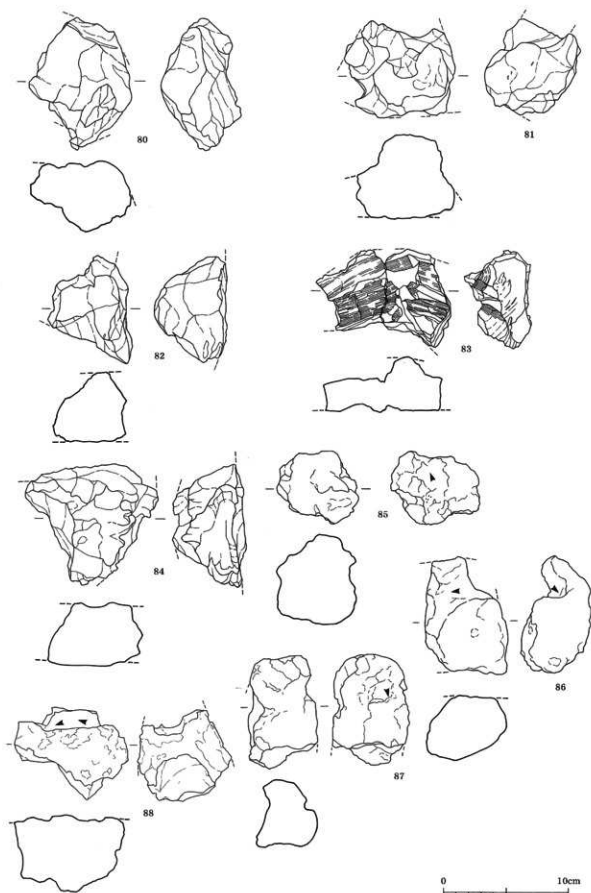


第22図 製鉄関連遺物 (4) (1/3)

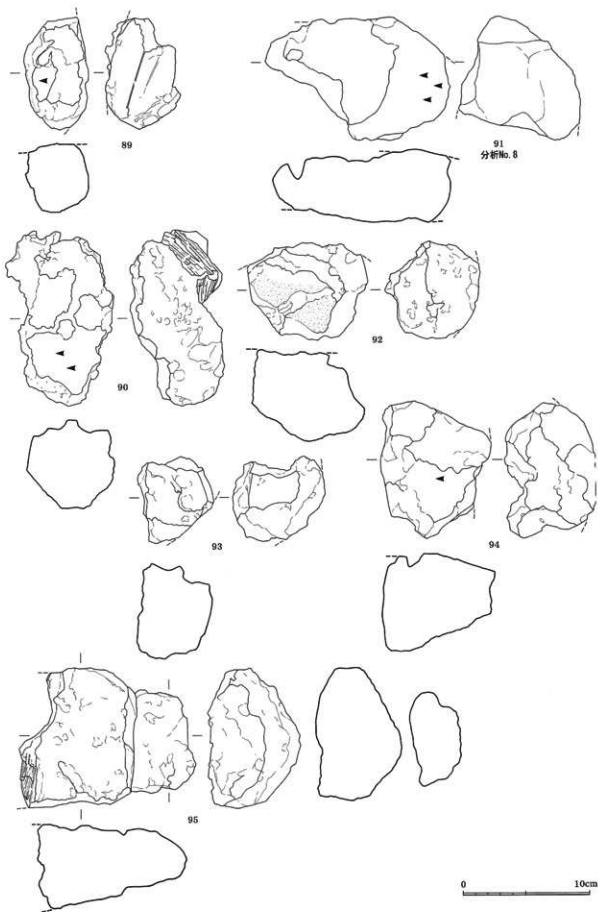




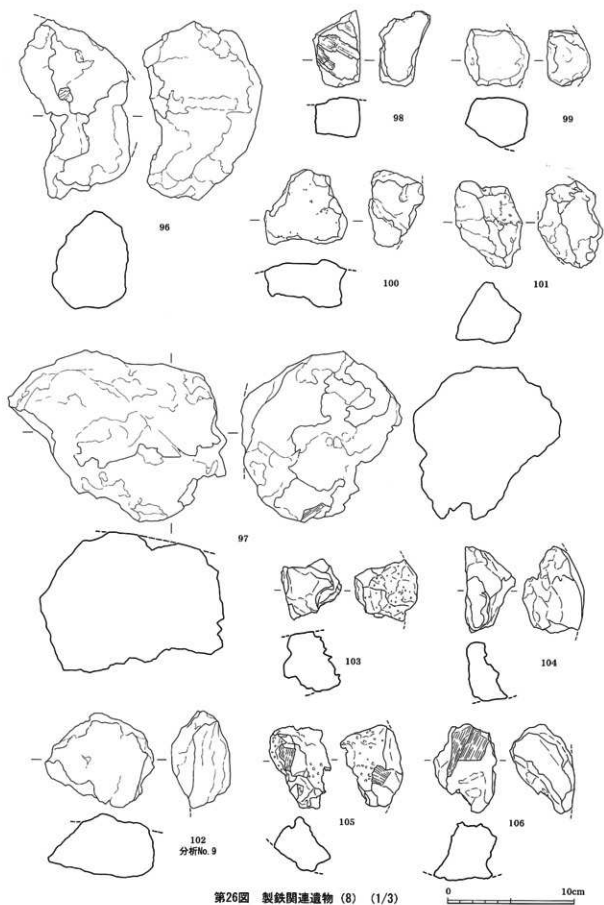
第23図 製鉄関連遺物 (5) (1/3)



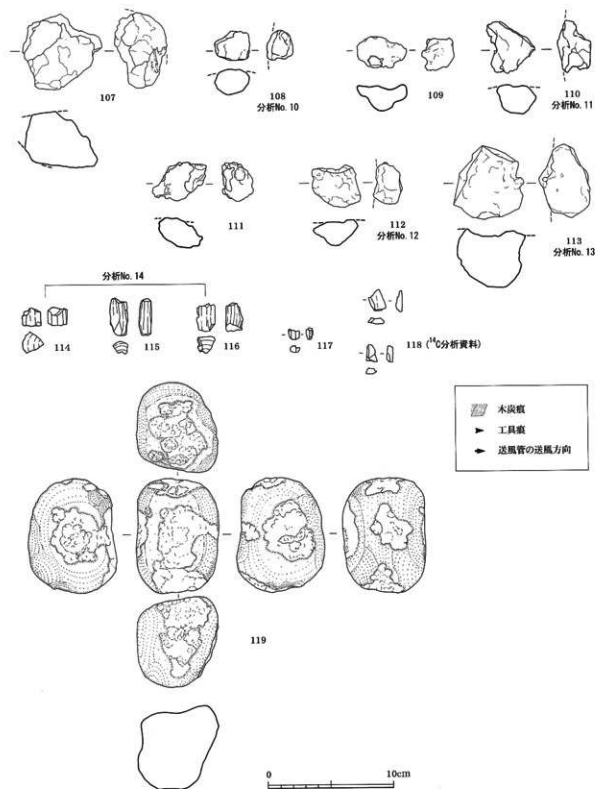
第24図 製鉄関連遺物 (6) (1/3)



第25圖 製鉄関連遺物 (7) (1/3)



第26圖 製鉄関連遺物 (8) (1/3)



第27図 製鉄関連遺物 (9) (1/3)

第3表 伊藤田中道跡関連遺物観察表(1)

観測 No.	遺物名	取付 地	計測値 (cm)			重量 g	線径	メタム度	遺物名	備考
			長さ	幅	厚さ					
1	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	5.4	5.0	3.7	44.5	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段下)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
2	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横化)	CK	5.6	5.4	2.9	42.1	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段下)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
3	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横化)	CK	7.6	7.5	4.3	117.5	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面の中程に上平の中程の付着をもつ上平の端を有する伊壁群。上平の幅は約1.5cmで、上段の下部の付着も認められる。断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
4	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	7.0	6.1	2.8	43.4	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
5	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	5.8	5.7	3.2	37.7	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
6	伊壁(長軸側・上段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	6.9	6.1	2.9	78.7	6	なし	1号伊壁 (S12)	内面は上段の下1.5cm前後の付着を有する伊壁群。断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
7	伊壁(長軸側・中段 上平・横化)	CK	7.5	7.3	3.3	94.2	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
8	伊壁(長軸側・中段 上平・横化)	CK	10.0	9.4	3.6	141.7	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面は上段の下1.5cm前後の付着を有する伊壁群。断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
9	伊壁(長軸側・中段 上平・横化)	CK	8.2	8.4	4.6	133.9	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
10	伊壁(長軸側・中段 下平・溝底・上平・溝 底・横溝・横化・ 横化)	CK	8.6	7.0	5.5	164.7	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
11	伊壁(長軸側中段下 平・溝底・上平・溝 底・横溝・横化・ 横化)	CK	7.9	7.4	4.1	128.5	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
12	伊壁(長軸側・中段 下平・溝底・上平・溝 底・横溝・横化・ 横化)	CK	9.1	8.5	3.5	120.9	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
13	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	9.7	9.7	7.1	262.8	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
14	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	13.0	12.3	5.4	430.6	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
15	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	11.1	10.6	5.8	397.5	4	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
16	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	8.3	6.3	4.8	109.8	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
17	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	7.2	6.1	5.2	146.5	5	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
18	伊壁(長軸側・下段 下平・溝底・横溝・ 横化)	CK	10.7	7.1	4.9	192.4	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
19	伊壁(短軸側コー ナー部・上段上平・ 溝底・横化)	CK	5.2	4.1	5.2	43.1	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
20	伊壁(短軸側コー ナー部・中段下平・ 溝底・横溝・横化)	CK	5.4	4.4	3.5	77.4	2	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
21	伊壁(短軸側コー ナー部・中段上平・ 横化)	CK	12.5	8.8	5.8	389.5	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
22	伊壁(短軸側コー ナー部・下段下平・ 溝底・横溝・横化)	CK	11.7	9.2	3.3	194.8	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
23	伊壁(短軸側コー ナー部・下段上平・ 溝底・横溝・横化)	CK	10.1	9.6	6.3	183.6	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
24	伊壁(短軸側コー ナー部・下段下平・ 溝底・横溝・横化)	CK	8.1	7.8	5.7	327.6	3	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
25	瓦葺	CK	2.9	2.4	1.3	5.1	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	内面は短軸側コーナー部を有する伊壁群。断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
26	瓦葺	CK	2.4	2.4	2.2	4.9	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
27	瓦葺	CK	5.3	5.2	2.8	46.6	1	なし	1号伊壁遺物群 (S12東上段)	断面が平坦で上段・下段との境界が不明。内面は上平の付着・突起で、外面は赤褐色となる。内面は上平が丸みをもって折返し、断面の縁取りを形成。胎土は入り込んで、表面は粗い。
28	伊壁 (自然・丸丸付)	-	-	-	-	20.0	5	なし	伊壁遺物群 (S12東上段)	伊壁遺物群 No. 136 自然付着伊壁群観察表。

第4表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (2)

順次 No.	遺物名	種別	計測値 (cm)			重量 g	直径 φ	メタリ 質	遺跡名	備考
			長さ	幅	厚さ					
29	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	20.0	5	なし	分館資料No. 5 137 成分分析資料観察表参照。	
30	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	25.4	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段一)	
31	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	216.0	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段中 埋存坑 1)	
32	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	198.4	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段中 埋存坑 2一坑)	
33	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	116.8	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段中 埋存坑 一坑)	
34	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	152.1	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段一)	
35	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	96.8	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段中 埋存坑 一坑)	
36	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	221.7	1	なし	1号砂 (S112)	
37	砂鉄 (磁鉄)	CIK	-	-	-	94.5	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段下 坑)	
38	砂鉄塊結構	CIK	2.9	2.6	1.0	8.5	4	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段中 埋存坑 1)	厚さ 7mm程度の砂鉄塊状塊。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。表面は凹凸した面が若干見られる。断面はほぼ砂鉄の形状である。
39	砂鉄塊結構	CIK	2.9	2.5	1.2	11.4	2	なし	1号砂 (S112 砂鉄)	断面よりやや凹凸した砂鉄塊状塊。上面の凹凸も多少、断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
40	砂鉄塊結構 (含鉄)	CIK	2.7	2.6	1.6	8.8	2	鋼化 (△)	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段 埋存坑 2)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
41	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け)	CIK	3.3	3.2	2.0	21.4	4	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	厚さ 1.5mm程度の砂鉄塊状塊。断面はマグネサイト化して直線状になっている。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
42	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け)	CIK	7.0	5.6	3.5	99.4	4	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 西上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
43	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け)	CIK	7.9	5.9	4.5	234.2	5	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 西上段)	厚さ 4.5mm程度の砂鉄塊状塊。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
44	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け・含鉄)	CIK	8.1	7.1	3.7	154.1	4	鋼化 (△)	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	若干平面的な凹凸と若干の凹凸がある砂鉄塊状塊。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
45	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け・含鉄)	CIK	7.6	9.3	4.2	314.4	5	鋼化 (△)	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
46	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け・含鉄)	CIK	6.2	3.6	2.2	35.4	5	円(C)	1号円形鉄 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
47	砂鉄塊結構 (マグネサイト系付 け・含鉄)	CIK	6.9	5.0	4.1	106.2	3	円(C)	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	厚さ 3.6mm程度の砂鉄塊状塊。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
48	マグネサイト系遺物	CIK	3.8	4.6	3.4	60.5	5	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	厚さ 2.5mm程度のマグネサイト系遺物。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
49	マグネサイト系遺物	CIK	6.3	4.3	3.8	77.2	4	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
50	マグネサイト系遺物	CIK	4.9	5.5	4.0	61.0	4	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
51	砂内埋存物 (砂鉄付)	CIK	6.9	6.3	5.6	167.8	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
52	砂内埋存物	CIK	7.9	5.7	3.5	183.2	2	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 西上段)	分館資料No. 5 137 成分分析資料観察表参照。
53	砂内埋存物 (砂鉄付)	CIK	8.6	7.0	5.2	202.5	3	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
54	工具片破片	CIK	0.7	0.6	0.1	0.1	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段一)	厚さ 0.6mm程度の工具片破片。断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
55	工具片破片	CIK	1.2	0.8	0.3	0.4	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段一)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
56	工具片破片	CIK	2.5	1.2	1.3	2.4	2	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 西上段一)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
57	遺出孔片	CIK	4.1	2.2	2.1	14.6	3	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段一)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
58	遺出孔片	CIK	6.2	4.2	4.2	76.4	2	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。
59	遺出孔片	CIK	6.9	4.8	3.8	101.9	1	なし	1号砂鉄埋存坑 (S112 東上段)	断面はほぼ正方形で、上面は砂鉄表面に覆いつたためか、高い位置に立っている。断面はほぼ砂鉄の形状である。

第5表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (3)

観測 No.	遺物名	形状	許容誤差 (mm)	重量 (g)	単位	メタル 成分	遺物名	備考		
60	鍍出片鉄	C区	9.4	5.2	41	115.8	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	前記から似た形状の小さな鍍出片鉄の発見箇所あり。右側面は鍍出片鉄の表面で、左側面は鍍出片鉄の表面で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
61	鍍出片鉄	C区	8.7	7.6	8.3	526.1	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	左側の鍍出片鉄は平らな状態で、右側の鍍出片鉄は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
62	鍍出片鉄	C区	15.1	7.0	5.3	563.1	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	表面が平らな状態で右側に鍍出片鉄の表面あり。左側の鍍出片鉄は平らな状態で、右側の鍍出片鉄は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
63	鍍出片鉄 (工具磨片付)	C区	4.4	4.4	3.1	46.6	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
64	鍍出片鉄 (工具磨片付)	C区	6.1	4.6	2.9	71.8	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
65	鍍出片鉄 (工具磨片付)	C区	6.3	5.8	4.4	181.7	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
66	鍍出片鉄 (工具磨片付)	C区	9.2	8.1	5.4	373.5	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
67	鍍出片鉄 (倉庫)	C区	9.4	6.3	3.0	107.0	3	酸化 (Cu)	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
68	鍍出片鉄	C区	4.8	4.7	2.5	39.9	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
69	鍍出片鉄	C区	8.2	6.5	3.9	186.5	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
70	鍍出片鉄	C区	10.8	9.1	5.8	371.8	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
71	鍍出片鉄	C区	10.1	9.3	5.4	433.2	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
72	鍍出片鉄	C区	13.9	9.5	5.2	444.7	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	分析結果は 1.08 鉄分析値が鉄含有率を示す。
73	鍍出片鉄	C区	18.1	9.8	4.9	546.6	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	二枚が重なって 500 g 近い重さをもつ鍍出片鉄の塊状遺物。表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
74	鍍出片鉄	C区	5.6	4.3	1.7	24.9	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
75	鍍出片鉄	C区	5.2	3.8	2.0	35.1	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	分析結果は 1.08 鉄分析値が鉄含有率を示す。
76	鍍出片鉄	C区	4.5	3.5	2.3	40.4	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	平らな鍍出片鉄が平らな状態で重なった鍍出片鉄の塊状遺物。表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
77	鍍出片鉄	C区	4.9	4.1	2.3	55.4	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
78	鍍出片鉄	C区	13.1	12.1	4.8	584.1	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
79	炉残塊	C区	10.1	8.0	5.8	407.3	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	上部の8角と下部の半円形からなる。厚さ5.5mmの半円形断面あり。右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
80	炉残塊	C区	10.5	8.2	6.4	453.3	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	上部の8角と下部の半円形からなる。厚さ5.5mmの半円形断面あり。右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
81	炉残塊	C区	8.8	7.6	7.8	474.2	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
82	炉残塊 (中央付き)	C区	8.0	6.7	5.8	309.2	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
83	炉残塊 (中央付き)	C区	10.6	7.8	5.4	315.4	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	上部に大きな丸みをもつ3角形の半円形断面あり。厚さ5.5mmの半円形断面あり。右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
84	炉残塊 (中央付き)	C区	10.6	9.6	5.9	530.1	1	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
85	炉残塊 (工具磨片付)	C区	6.5	5.8	7.1	309.0	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
86	炉残塊 (工具磨片付)	C区	9.4	6.5	5.5	349.3	3	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	上部に半円形断面の半円形断面あり。厚さ5.5mmの半円形断面あり。右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
87	炉残塊 (工具磨片付)	C区	8.8	6.5	6.1	366.2	4	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
88	炉残塊 (工具磨片付)	C区	9.0	6.2	7.4	430.6	4	H(C)	1号中環鉄貯蔵坑(S112西上層)	上部の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
89	炉残塊 (中央付き付き +中央付き+工具磨片付 +中央付き)	C区	8.5	5.1	5.9	363.2	5	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	下部にスリヤの炉残塊と上部に平らな状態で重なった鍍出片鉄の塊状遺物。表面は平らな状態で、右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。
90	炉残塊 (中央付き付き +工具磨片付)	C区	13.8	8.5	7.4	698.2	2	なし	1号中環鉄貯蔵坑(S112東上層)	上部に半円形断面の半円形断面あり。厚さ5.5mmの半円形断面あり。右側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、左側の鍍出片鉄の表面は平らな状態で、両側面とも鍍出片鉄の表面である。表面は平らな状態で、鍍出片鉄の表面に細かな凹凸がある。



第6表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (4)

調査 No.	遺物名	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	形状 メタル度	観察者	備考	
			長さ	幅	厚さ					
91	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	14.2	9.8	8.8	1175.4	4	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 8 138 頁分析資料目録表参照。
92	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	9.5	4.6	7.5	631.4	4	無(○)	1号約腕環群 (S112 東土坑)	上下部と上下部の観察ができていない鉄製の約腕環群。左右の腕部と上下部の観察が確認となる。平面的な上面には観察が確認し、下部の観察が確認となっている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
93	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	7.3	6.8	7.5	360.9	3	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	下部の観察に上部の観察と上部の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
94	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	10.8	8.7	7.7	781.2	3	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	観察者 取りかきした約腕環の観察が確認される。上下部と上部の観察が確認される。上部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
95	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	14.0	11.1	7.4	1083.5	3	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	2号約腕環の約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
96	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	14.2	8.7	9.4	1270.0	2	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
97	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	17.4	13.5	12.7	2850.0	2	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	右腕部と上下部の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
98	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.1	3.7	4.0	113.7	2	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
99	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	5.0	4.5	3.9	134.2	3	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
100	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.6	6.0	4.4	161.3	1	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
101	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.8	5.2	5.1	190.6	2	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
102	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	8.7	7.5	4.7	308.2	3	無(○)	1号約腕環群 (S112 東土坑)	分析資料No. 9 139 頁分析資料目録表参照。
103	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	4.8	4.7	5.0	98.5	1	なし	1号約腕環群 (S112 東土坑)	左側の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
104	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.8	4.0	4.9	104.2	3	なし	1号約腕環群 (S112 東土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
105	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.6	4.9	4.9	107.1	2	なし	1号約腕環群 (S112 東土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
106	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	7.0	5.0	5.1	176.7	3	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
107	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	6.3	6.0	4.5	162.0	3	無(△)	1号約腕環群 (S112 東土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
108	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	2.7	2.3	1.8	16.0	5	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 10 139 頁分析資料目録表参照。
109	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	3.9	2.5	2.6	19.5	4	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
110	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	3.8	4.1	2.2	25.4	5	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 11 139 頁分析資料目録表参照。
111	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	4.2	3.1	2.5	25.8	4	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。
112	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	3.4	3.8	2.2	26.9	5	無(○)	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 12 140 頁分析資料目録表参照。
113	約腕環 (約腕環結核・ ツギネ付付者・ 約床土付者)	C区	5.5	5.8	4.0	186.4	6	無(○)	1号約腕環群 (S112 東土坑)	分析資料No. 13 140 頁分析資料目録表参照。
114	木炭	C区	1.4	1.5	1.6	1.7	1	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 14 140 頁分析資料目録表参照。
115	木炭	C区	3.0	1.5	1.5	2.0	1	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 14 140 頁分析資料目録表参照。
116	木炭	C区	2.3	1.4	1.3	2.1	1	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	分析資料No. 14 140 頁分析資料目録表参照。
117	木炭	C区	0.9	0.5	0.5	0.3	1	なし	1号約腕環群 (S112 東土坑)	-
118	木炭 (C 14分析用)	C区	1.7	0.4	0.4	0.3	1	なし	1号約腕環群 (S112)	第5遺跡1号調査
119	たたき石 (ハンマー ストーン)	C区	8.1	6.6	6.6	588.3	1	なし	1号約腕環群 (S112 西土坑)	約腕環の観察が確認される。観察が確認されている。上下部は平らな形状となっており、下部は上下部の観察は確認され、下部の観察が確認されている。量測方法は10mm単位で、多量の観察が行われる。下部は右方に傾きより上より、右側に傾きととなる。

(作製 穴澤義功)

## c 溝(水路)跡

## 第1号溝(SD-5)(第28図)

調査区中央を東西に貫く形で150mにわたって検出された古代の水路である。上流側にあたるD区西端で幅1.25m、深さ1.25m、底面標高10.70m、最も下流側のA区東端部で幅2.0m、深さ0.9m、底面標高10.55mである。この傾斜は100mで7.5cm下るといふ緩やかなものである。断面形状はU字形である。ほぼ一直線に伸びるが、A区でやや南に振れる。これはそのまま東側に延長すれば古代の道路に突き当たることから、徐々に南に曲げて、最終的には道路の南側に沿って東進するようにしたのであろう。

底に砂層があり、流水があったことが堆積状況からわかる。少なくとも2回の掘り直しが認められる。

## 遺物(第30図)

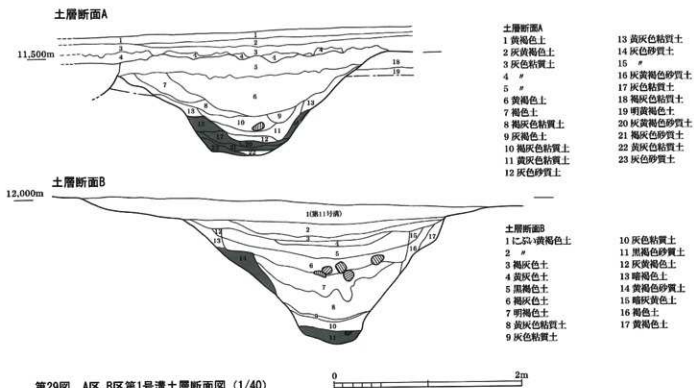
第30図120から123、および第31図124と125が出土遺物である。完形の壺形土器1点と、木製鎌、それに直径27cmの何らかの蓋と思われる円形の板しかない。鎌(第31図124)は残存長40.6cmで、残存長は40.6cmで、全形は杓子形を呈する。基部は幅6.9cmで長く伸び、そのほぼ中央に4.2cm×3.9cmの方形の柄穴が穿たれている。そして、その穴の約2cm基部先端側に釘の頭様のものが見える(金属探知機による金属反応は無し)。基部の先端部は薄くなり、両側には浅い抉りが入る。刃部は最大幅15.3cmで、二又になっているように見えるが、基部に近い方に方形の穴が穿たれていた可能性があり、その場合は穴が2カ所あったことになり、先端部は二又ではなかったことになる。刃部は薄く5~6mmほどしかなく、鉄製の刃部が装着されるのであろう。柄は曲柄で基部に縄縛したものか、直柄で柄穴に固定したものか、その使用方法は不明である。あるいは犁のように使用した可能性があるが、その場合にはあまりにも薄く、使用に耐えられない可能性があるため、ここでは、一応鎌として扱っておく。

出土土器は、後世の混入と考えられる土器(122の土師器杯と123の瓦質土器鍋)を除くと、須恵器高坏脚部と土師器小型壺である。第30図120の須恵器脚部は、端部が小さくつまみ上げられており、古墳時代後期のものである。121の壺は外面をヘラ削りしており、形態的には古墳時代の埴を思わせる。類例に乏しいが、古代のものであろう。

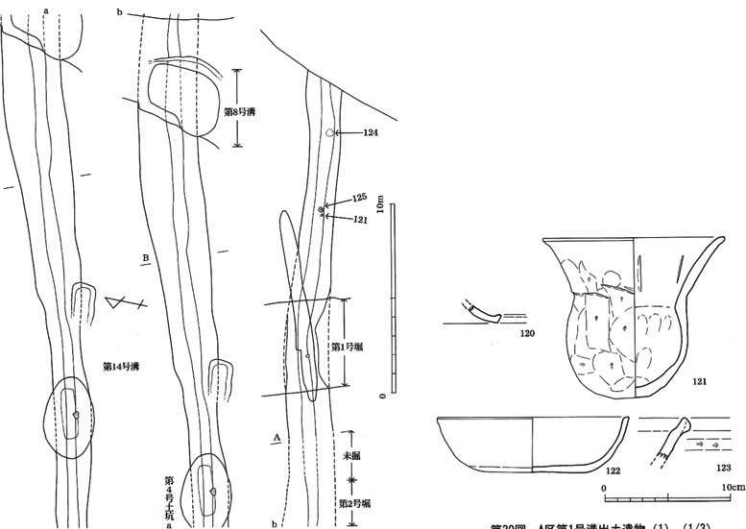
## 第2号溝(SD-2)(第32図)

B区で確認された北東から南西方向に直線的に伸びる溝で、最大幅3.2m、深さ1.4~1.5mである。東側はB区の区画溝である第8号溝により切られており、西側は同じく区画溝と考えられる第9号溝で切れ、さらにD区に伸びている。

出土遺物は第30図126と127である。126は甕形態であるが、本来は127の把手が付く甕であろう。器壁は薄く作られている。

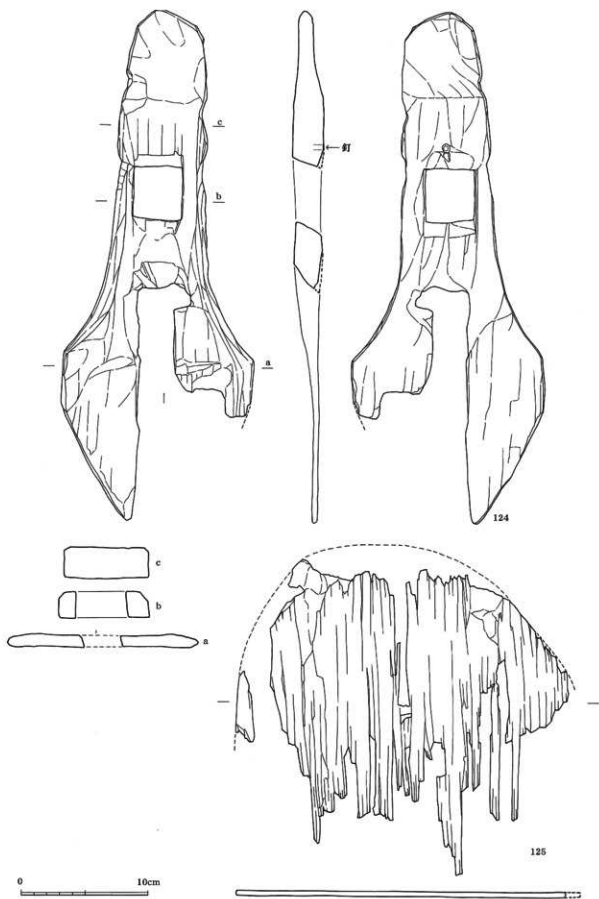


第29图 A区,B区第1号溝土層断面图 (1/40)

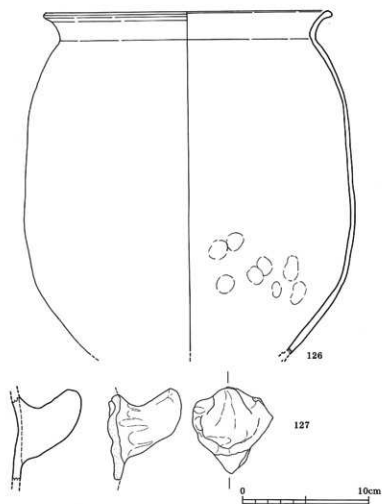


第28图 A~D区第1号溝実測图 (1/200)

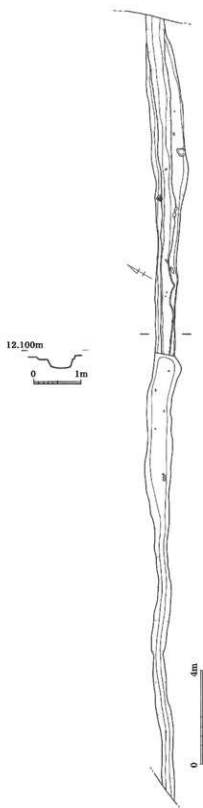
第30图 A区第1号溝出土遺物 (1) (1/3)



第31图 A区第1号清出土遺物 (2) (1/3)



第33图 B区第2号清出土遺物 (1/3)



第32图 B区第2号清実測図